

川柳塔

昭和五十六年二月二十五日印刷
昭和五十六年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六四六号



日川協加盟

No. 646

三月号

オーエスケージェフ

熱い心を満たす

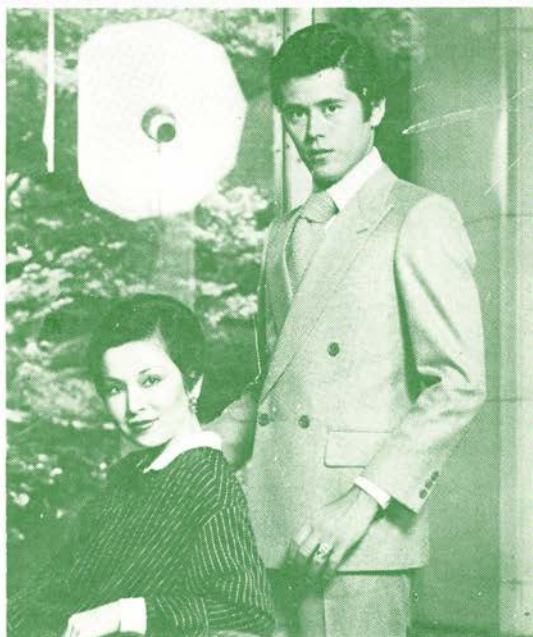
装うのはいいものだ、

思いのままに

気どったカッコウはきらいだ、

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社オーエスケー



つめたさに、おいしさをそえて……

アイスクャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイン



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーゾマ店
近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪・京都各店)
サン・ストア(中之島・淀屋橋各店)
京阪モール 新川売店 虹のまち鹿鳴
南海難波駅構内店



大 阪 ・ な ん ば



TEL (641) 0551

刊 發 鑑 名

派手な彩さけて一年の計が立ち

設計図 音痴同士のお芽出たさ

元日のあくる日去年の髭が伸び

仏心の芽生えか郷愁あたたかく

割り勘へ暮しの嘘の小気味よく

庵 々 生 島 中

日本川柳人名鑑が、昨年押しつまってから日本川柳協会から生れた。見事に生れた。披らけば各頁、伝統と香り高い過去の営み、又これからのあるべき姿、流れの出発点のエポックとしての自負に燃えさかっている。後世必ずや、史的素材たること間違いないの確信を持つものである。欲を云えば初めての企画だったせいもあり、どこことなく脆弱な批判もあるかも知れぬが、装釘や、濃紺に金文字の浮く表紙、殆ど皆無に近い誤植の内容等、ひ

そかに誇り得るところをみるのは、上梓にあたっての編集実行委員並に事務局員の言葉に絶する労苦があったことは言わずもがなである。しかるに広瀬反省実行委員長をはじめ各委員は異口同音に、些かでも柳界交流の一助ともなれば無上の本懐であると、心から飲んで居られるのは実に尊い奉仕の柳魂であると感謝にたえない。残本少しと聞くが是非一本机上にほしいものである。

号 月 三 塔 柳 川

座右の句

凡人は裏も表もおなじ顔

(美乙女)

私の句

ルンペンも春は万花の下で寝る

野呂鵜汀

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

名鑑 発刊

中島生々庵選……………(1)

生活即川柳

川村好郎……………(2)

■川柳太平記34 素行堂松鱸と大坂柳界

東野大八……………(24)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(二丁)

中島生々庵選……………(26)

川柳塔(同人作品)

菊沢小松園選……………(28)

水煙抄

野村太茂津……………(23)

秀句鑑賞「同人吟」

板尾岳人……………(43)

■川柳塔15周年記念特集

白岩文衛……………(40)

15周年おめでとう会に出席して①

橘高薫風選……………(48)

■同人特集 女性同人一句集

白岩文衛……………(40)

■同人特集 女性同人一句集

橘高薫風選……………(48)

愛染帖

橘高薫風選……………(48)

生活即川柳

川村好郎

私たち生活の中にしたい事と、しなければならぬことがある。行きたいと思ふことと行かねばならないことがある。この二つのどちらに重点を置いていだろうか。したいと思ふ方はほぼ本能の働きであり、しなければならぬ方は道である。しかもこの二つが一つになることが私たちの生きてゆく本当の道でなかるうか。

明治天皇が或る時、「私は京都が好きじや、だから京都へはあまり行かぬ」と申されたこと承っている。私だったら京都が大好きだから仕事を捨ててもいつも行くと言う。京都は明治天皇のご誕生地であり、少年時代を過ごされた処で、代々の皇室のあった京都であり、山紫水明の名勝地でもある。

「京都は好きじや」とのお言葉は当然のことである。崩御の後、その山陵を伏見桃山に選定されたのも故ある哉である。思いの

選句の苦心……………若本多久志……………(51)

秀句鑑賞欄に寄せて……………直原七面山……………(51)

戸田古方さんを悼む……………中島生々庵・西尾菜……………(52)

初歩教室……………本田恵二朗……………(56)

大萬川柳「蟹」……………川村好郎選……………(58)

柳界展望……………羽原静歩……………(60)

天理教修養科雄感……………桑原道夫……………(67)

一分間の柳論……………津守柳伸……………(71)

雅号ぶっちゃけばなし……………本社二月句会……………(62)

各地柳壇……………(佳句地10選)羽原静歩選……………(66)

「半年」……………小砂白汀選……………(54)

「一路集「粉」」……………菊田いさむ選……………(54)

「慕う」……………伏見茂美選……………(55)

編集後記……………(薰風・酔々・鬼遊・史好)……………(73)

座右の句

夕桜一人静かに歩きたし

(小石)

私の句

粉な雪を総身に受けて別れけり

大峠葉子

ままになる天皇にして、せなければならぬことに生活の基盤をおき、行きたい方は耐え、ひかえておられる。国を興し、家を興す基がここにあると思う。

私の嫁いだ娘が、私が病床にあると聞けば飛んで見舞いに来る。ある時姑さんが入院をしたという報せがあった。その時私の娘が「お見舞いに行かねばならんどううか」としつぶ病院へ行つた。嫁いだ上は先方の姑さんが大切である。これは行かねばならぬ道である。私の場合は子として親への本能で見舞いに行かねばおれぬのである。私を見舞いに来る気持と同じように飛んで行くように二つが一つになってこそ、嫁として娘としての本当の生き方であり、そのなるよう努むべきであろう。

生活と川柳、それはどうなっているだろう。生活のために川柳を捨てていないだろうか。締切期日までに投句せねばならぬ、句会へも出席せねば義理が悪い。それもよからう。句会に出席したくてたまらない。そして私の生活、人生から湧き出たものを一句にまとめたいと生活の重要さと、川柳の楽しさとが一つになる。生活があつての川柳であり、川柳あつての生活である。そんな道を私は歩みたい。



中島生々庵選

岡山県 嘉数 千代香

先頭にたつ駄馬なれば狂えない
貧灯を捧げ誓いが炎えてくる
誇るもの持たぬ余生を羨まれ
満足な疲れをしまい湯に浮かせ
散り際の花をわたしとしてみつめ

松原市 谷垣史好

雀まんまる厳冬に耐えている
文明を怨むポケットベルが鳴る
大戦がしばらくなくて地球冷え
シベリアに遺恨はないが寒むすぎる
八十の母と五十の子の暮らし

大阪市 西森花村

甘いのは信者と飴の恵比須さん
演習地蝶が来るとは大胆な
鶏も私も翔べぬ二本足

主婦業のボーマス老眼鏡がよし
雪どけの石仏衣が濡れている

青森市 工藤甲吉

生きているときの顔みな嘘ばかり
大砲にバター追いつき追い越され
中流の暮らし孝子が出なくなり
人間もだんだん檻の中に生き
五十年くいしばっては齒も弱り

尼崎市 黒川紫香

まだ残るおせち料理でひる済ます
出張で社長とパチンコしてる秘書
古時計老舗の奥で鳴る寒さ
筆書きの封書を開ける鉄出す
塩鯖を焼いた匂いで迎えられ

高槻市 若柳潮花
百八つで足らぬ煩惱抱いて明け

妃殿下の瞳のなかの精薄児

振袖の柄へふり向くブーツの娘

どの弟子も師匠の悪い癖を持ち

めずらしく妻七草へ朝を起き

出雲市

原 独 仙

四股踏んで米寿へ挑む新春や佳し

夢よもう一度へ神は横を向き

うちの子に限って親の色めがね

加留多とり節くれた手見直され

(あゝ不二田さん)

川柳塔仰ぎ安堵の眼を閉じる

倉敷市

藤 井 春 日

曇らしちゃならぬこの子の涼しい瞳

細雪似合う女の蛇の目傘

宝石より貴方の誠が欲しいのよ

ぐい呑みの美味さへ明日の夢を汲む

真の男落目になつて燃え上り

倉敷市

水 粉 千 翁

盃を受け座布団の重さ知る

四股を踏む私の朝の見せどころ

遍照のいのち昂ぶる陽を仰ぐ

足るを知るものにほのぼの陽が昇る

かしこまりましたと芯を見せました

倉敷市

野 田 素身郎

商戦は厳し元日だけ休み

正月もポケットベルを持たされる

除夜の鐘今年も可もなし不可もなし

この一年隠しとおせた除夜の鐘

ともすれば過ぎる酒とは知りながら

倉敷市

小 幡 里 風

樹齢百年松喰虫に倒される

真すぐい男が迷うネオン街

かけごとの好きな夫婦の空財布

陽の当る村で長生きごっこする

小刻みに足踏みをしてバス乗り場

倉吉市

奥 谷 弘 朗

値上りへ買わぬ使わぬ自衛策

鼻声に男の顔が崩れ出し

割箸で茶碗をたたくも芸のうち

方便の嘘も言えないお人好し

外見をつくろう無駄に気がつかず

大阪市

金 井 文 秋

出しゃばりのところもあるが役に立ち

感情を露骨に出している若さ

年金暮らし儲け話にすぐ乗らず

健康が百まで生きる夢をくれ

エスカレーターの手摺を持たぬ有頂点

大阪市

中 川 滋 雀

元旦の鏡にくもり見せられぬ

過去が背を押すから一步向い風

敵のない生活へ崩れてくる自信

その裏を知っているから口を閉じ

さよならの語尾がかすれた夜の駅

生駒市

草 深 醉 升

銀盃を押しただいて古稀の新春

老妻も逝つて淋しい雑煮箸

坊さんの来る日で朝寝もして居れず

寝たきりになつても見てる相場欄

他人には語れぬ悩み持つ辛さ

宝塚市

傍 島 静 馬

明眸皓齒大口開いて笑えない

明つ放しの家を空巢素通りし

御高説やつと終つた大拍手

亡父の夢亡母の序に見る程度

ありのまま云うて借金断られ

京都市

松 川 杜 的

お地蔵さんに灯があり心なごむ朝

「歩調トレノ」と云いたいようなブーツ来る

元旦の音でカレンダーめくられる

玉砂利へもうおどろかぬ神の鶏

ピンボケでよし遺影の恩師笑む

神戸市

仲 どんたく

十円でまとめて拝む初詣で

茶の間にも十大ニュースあつた暮

診てもらふ医者を診察する患者

喪の知らせ君もやめになったのか

青春もあつたよパリーの屋根の下

岸和田市

高 橋 操 子

ほんとうはこうと云いたい過去を抱き

日本はいいな元旦の床の松

生真面目に生きて人生に悔残す

ほんとうに死にはつたんや思てくる

初市の顔御主人もキモノ好き

宇部市

平 田 実 男

七人の敵がいるからわくフアイト

付添婦身内が来ればかいがいし

立志伝嘘のところが面白い

胃薬を今年も買つとく大晦日

(長男成人式)

見かけだけは一人前になつており

倉敷市

田 垣 方 大

獅子舞はテレビで知つてるだけの孫

日溜りで無念無想の冬の虻

老漁夫の経験気象台も負け

胃袋の快感割箸さつと裂き

母子手帳涙のにじむ新学期

藤井寺市

児 島 与呂志

玄関を開けると妻の声がある

長女二女三女がもめる台所

大根を煮る音やさしい母思う

筆まめな便りが遅れて来る不安

下駄の音むなしい冬のアスファルト

松山市

谷 真 風

新聞の日付で今日を確かめる

影もない足跡もないのちかな

自炊した経験役立つ不幸

独言亡妻と話しているわたし

腕組をして雑音を遠ざける

鳥取県 森田 布堂

やがてまた勝ってくるぞの世が来そう

師の影を踏んで暴れて捕えられ

養鶏家卵も糞も金に換え

W・Cとあるスリッパで酔うて来る

豪雪に嫁入りとなる大安日

八尾市 高杉 鬼遊

病院の坂を下れば街は春

豪雪のテレビ茶の間はお湯が沸き

デスマスク誰に気がねもなく眠り

与太郎に礼服が要ることとなり

人間を上下に分ける進学期

竹原市 小島 蘭幸

オモチャ箱整然として風邪続く

飛べぬ父を誰も責めたりなどしない

冬の川アヒルが二匹いてのどか

酒の父ジキルとハイドに似ておかし

なにもかも忘れる趣味のある強さ

奈良県 上田 翠光

孫にまつわられて賀状はかどらず

カーターも百恵も去って年変る

初詣今年は孫が肩に乗る

謹賀新年昔のくせのままの文字

大の字になっても二疊しかいらす

八尾市 高橋 夕花

お元旦妻も一献かたむける

父と母息子二人の祝い膳

キッチンに朱の膳朱の盆新春に染め

三カ日母の座ぶとん温くもらず

玄関が開くあれば二十になった音

堺市 大道 美乙女

すべるよりゲレンデ多彩競いあう

どしや降りに閉じこめられた宿の下駄

斗鶏は鉢巻ほしい顔で出る

紋付を着るとりりしく父に似る

伸びざかりずらり並んだ恐ろしさ

島根県 榊原 秀子

長尾鶏わたしの春と謳歌する

松の雪みどりは強くあれという

多忙だといえは羨む人がおり

山育ち日本海の波が好き

曲がること知らぬつららで美しい

大阪市 本多 柳志

原文を凌ぐ誤植の文が冴え

將軍の末路小さな記事になり

保護色となる大阪のネオン点く

美しい嘘でビールを酌ぎに来る

ローカル線の旅はよきかな梅の花

西宮市

藤村メ女

ある日ふと蜘蛛の巣作り見てあかず

いつからか炬燵の好きな年となり

離婚したわけを他人は聞きたがり

孫が捨て姑が拾うて採めている

楽天家心にいつも青い鳥

今治市

月原宵明

労組の挙手は拳を突上げる

タバコ屋の炬燵は窓へ手が届き

耐えてきた寡婦水仙の白が好き

袖カバー年功序列の中に生き

湯豆腐でよしこの友とこの酒と

島根県

堀江正朗

聞えねばよかった耳の気紛れに

タオルから教えてもらった顔の皺

雪降れば雪の百景想い出し

このへんで折れる呼吸も雑煮餅

春を待つ僕は炬燵を止り木に

島根県

堀江芳子

羽ばたけぬ鶏でもくじけない私

お茶注いでいつしか解けている不思議

初春のどか夫の謠も聞き馴れて

風の向き変れば雪も舞いを変え

ピンぼけの返事が戻る酔い機嫌

仙台市

川村映輝

炬燵から暴風雪を案じてる

停電にラジオ聞くのも久しぶり

停電三月電気のついた夢を見る

雪の朝雀にパンを強請られる

真相を話しするにも下手上手

松原市

北野久子

人の波あ、初恋にまだ逢えず

同居三年やっど姑も腰を据え

ワンマンが直れば魅力のない男

禁煙の夫の素振りが気にかゝり

結構やと思えば少し肥りぎみ

羽曳野市

塩満敏

あ、都会コインロッカーにある秘密

七人の敵へ靴ひもしめ直す

御苦労さん妻の白髪を抜いてやり

石の不幸は蹴られる石で

カラオケも少しうたつて妻と飲む

羽咋市

三宅ろ亭

吹雪より入れば前後とも叩き

宴会の朝は車置いて出る

愚痴半分混ぜて小姑ら来て喋り

下根雪空洞作りふきのとう

晩酌を妻にもすすめ置き炬燵

綾瀬市

大山と金

心ではお礼云つてて口に出ず

釣銭はとつておきな一万円

老友のさす盃の手がふるえ

教わつて習つて母の味が出ず
富士山は遠くで見るもの朝霞

大阪市 西出楓楽

子のための踏み絵はしかとしかと踏む
たまさかの閑は借りもの着る如し

老父母が笑めば円空仏となる

言葉選るどこまで行けど義理の仲

愛のかけら拾ひ集めている和解

島根県 錦織文子

雪の袈裟拂つて野仏の眼に出逢う

掘炬燵童話の中に孫と住む

今日も雪追うまい南天の小鳥たち

死んだら泣いてあげると言う五才

数珠を持つ心に貧しさなど見えず

大阪市 大坂形水

表彰状くれるらし経歴聞きにくる

代表で心にもない謝辞述べる

俺の金俺が使うの豪華宴

続くもの二日続けて喪服着る

坂のある町で出逢うたファッション

富田林市 板尾岳人

鴨なんば好きな男は山にあり

帽子屋の犬が見ている冬の山

三月の山脈やかなりし露の臺

便りする男は今日も山にあり

八百屋から帰ると山は雪景色

行雲流水空徳利と横になる

有難い有難いと母強し

ろくでない男に逢う夜の紅をひき

パーティーへおぼはん赤着て翔んで行く

故郷で死にたかつた亡父の骨

それっ切り会わぬ女の意地を見た

色あせた記憶の中の小さい罪

まっすぐに見つめる幼い瞳に負ける

住んで居る家で人間価値づかれ

弱虫の愛想笑いへ匙を投げ

雑菌がウヨウヨ地下街にも慣れて

(療養中の愛論氏御令聞へ)

全快へあと一息の年越され

子供等に酒飲め飲めとお元日

二人二人二人ささやいて愛 戎橋

受取りの裏で筆算頭割り

学歴の無い子が親の役に立ち

きれいな秘密私は見ない事にする

その続きだあーれも知らないひとり言

冬の雲きれいな嘘だと読んでいる

(友人の訃)

神戸市 中村ゆきを

桜井市 岩本雀踊子

東大阪市 市場没食子

姫路市 植村客遊子

富田林市 岩田美代

流れ星寒いぞう煮にしてしまふ

大阪市 江城修史

(姉逝く)

生きた日の悲しみまとめて姉は逝き

惜別の柩に空しさ思い知る

惜別が言葉にならぬ夜の冷え

帰省子が心の空洞埋めてくれ

大阪市 天正千梢

正月だ言いわけなどはよし給え

涙の武器に振り廻されている男

ひとり言雨だれの如く老いかとも

老いという字がびったしの私で

大阪市 香川酔々

西塔も東塔も枯れ冬の天

西方は確かに浄土落日炎え

木枯しに五百羅漢の涙癖

十字架を藁人形に背負わせる

守口市 羽原静歩

産んで産んで卵を産んで鶏が死に

骨董屋寒い顔して客を待ち

ひよっとこがおかめと話すターミナル

人生のグーチヨキパーがままならず

島根県 小砂白汀

日溜りへ積った愚痴を捨てにくる

春雷に義理をたてたかばたん雪

雪よりも白い辛夷をねたむ雪

子には子の思わくがあり乗ってこず

堺市 高橋千万子

ガラス屋を待つ元旦のセロテープ

成功に妥協も一つの道と知る

いくばくの金を老女は武器とする

謙遜の辞退あつさりみとめられ

鳥取市 小林由多香

鶏しかとたまごを抱いて寄せつけず

陳情をインスタントコーヒで待たされる

残業から帰れば巨人負けていた

お別れの灯そつとそつと消し

鳥取市 河村日満

年金の夢にボーナスなどの欲

北国は豪雪と聴く雨しきり

信心のあんなに楽しそうな数珠

どう値上げされてもやめられぬ酒よ

大田市 藤田軒太樓

あぐらから正座に替わる勝負どこ

ひと押しの決め手を欠いた油断負け

老醜の残り火とみる胸飾り

屠蘇を酌む父子に溝は埋められる

岡山市 川端柳子

賀状掌にずしりとはなれがたき人

暖い掌だった忘れぬことにする

似た人に逢うてはぐれたターミナル

孫の欲三つのおねがいしたという

豪雪と冷えが今年を暗示する

平田市

久家代仕男

里帰り挨拶抜きで蜜柑剥く
染みついた殻が理屈を寄せつけず

悪筆を気解るがるまい筆初め

竹原市

山内静水

父の忌へ不幸者奴がみな集う

いまものを言うたら私も哭けそうで
だれからのリレーか句座の飴ん玉

憎めない四角い顔の目鼻立ち

兵庫県

遠山可住

遠慮したつもりへ声がかからない

定年と知らず張切る犬を連れ

受話器置いて十円戻って来た失意

あきらめに達してものが見えはじめ

竹原市

森井菁居

禁酒するつもりはないが友の計よ

企みのボールへ酔った風をする

四季が無い八百屋で春の彩を撰る

ふるさとよ煮込みうどんの味を噛む

米子市

佐伯越子

玉蘭のように二人が添うて住み

子のくれた金は筆筒にしばし置く

なんとなく浮気の噂耳が寄り

張りつめた糸が気になる寡婦の日々

大阪市

西川善紫

空で風と戯れてる奴風

女客賑やかすぎて姦しい

鳴かず飛ばさずで不遇に耐えている

返せないご恩一ぱい世間様

大阪市

横地雅風

定年の辞令に精勤褒めてない

序列どうつけよう無口は後にされ

打ち水へ靴が危険を知る重さ

形だけ結納やつぱり金が要り

和歌山市

野村太茂津

心音に触れる訓えは懐に

心の壁を横顔に見る疲れ

白足袋に女こぼれる凍てた道

早春の風へ亡友の手帖は懐に

米子市

林瑞枝

こだわりの妬心なだめるうすい紅

横顔に何の銜いも無い笑顔

ふるさとの梵鐘孤愁の胸に鳴る

手を広げ愛の行方で待つチャンス

兵庫県

大江秋月

願いごと多く百円玉を投げ

初詣でお札に商魂見付けたり

時刻表の誤字探し出す旅の閑

肩書が無いからずばり物が云え

松江市

小林孤呂二

元旦や判官びいきの夫婦かな

經濟大国だから振られる紙の旗
八十路のちちが唄えるのは端唄
対照的な顔でシテとワキの仲

兵庫県

辻 文 平

涙声やり場見付けて子をあやし
実印を押す手に風もない寒さ
目を閉じて確かめて見る愛の彩
掴むもの見付からぬまゝ、初詣

松江市

恒 松 町 紅

肩書がつかぬ名刺で出しおくれ
牡丹雪人が倒産する話
ガラス窓に冬の静寂忍び寄る
家を売る話へ知恵の出ぬ男

玉野市

小 谷 仙 山

財産の無い気安さが猫とじやれ
見るだけで良いと商人荷を開き
何もかもあなたまかせの鉢の梅
倒れるまで積まねば積木気が済まず

大阪市

欄 蘭

月までが無情に見える夜寒かな
五百羅漢 雪を被った亡父の顔
空の旅三りんぼうを避ける老母
水清くわさびの辛さよく育ち

奈良県

村 上 春 巳

年賀状遅れて来たのへほつとする
豪雪のニュース湯どうふ喰べながら

万才へ留守番一人の高笑い
受験絵馬 神様戸惑う誤字当字

東大阪市

森 下 愛 論

初詣玉砂利を踏む歩が揃い
ほゝえみを見せて日溜りの道祖神
イヤリング揺らして女よく喋り
宴会は軍歌となつて終りかけ

松江市

舟 木 与 根 一

顔芸もエリートらしい使い分け
欠点の鼻で似顔絵生きている
孫キョトンとする嫁の八つ当り
めでたくもあり定退の年が明け

呉 市

林 野 甍 光

障害者年暮開け福祉の目を信じ
ふぐ通の男に地酒見直され
雪に埋まりいよいよ佗し無人駅
会釈する目に感情のまだ溶けず

米子市

小 西 雄 々

小会社も生きねばならず交際費
終点に降りる客なし赤字線
ファイトなどめつたに出せず宮仕え
ライバルの立場もわかるゆとりもつ

笠岡市

松 本 忠 三

年玉の値上げ要求通りにし
三カ日過ぎて小言も出はじめる
捺印が気性どおりにひん曲り

チャンネルの争いもなく老夫婦

美祿市

安平次 弘道

結果論また責められる非常口

母を恋う時悪人の目がさめる

倦怠期感情線がもつれてる

葬儀屋の指示できばきと泣いとれず

大阪市

河野 君子

入院の姉への賀状もおめでとう

おせちの残りつつく姿は母のもの

吊橋を渡る生き方だつてある

そのムードに遠く朝のコーヒー店

倉敷市

稲田 豊作

(喜寿の年)

嫁がまた明治の知恵を借りにくる

十字架を捨てて背伸びがしたくなり

ガッツポーズする日もあつて老春よ

喜寿迎え目標新た歩も新た

和歌山市

福本 英子

暮からの酒まだつづく三ヶ日

酒の爛人肌にして誰も来ぬ

日記帳開けば二人だけの文字

弱肉強食それでも独りにはなれず

大阪市

津守 柳伸

聖し夜サンマの香りして一人

金繰りにかかわりはなく年が明け

共稼ぎ男と女にある打算

しまい込む話は聞かぬ事にする

大阪市

河井 庸佑

言わぬが花言えないのか言わんのか

席蹴つて自分が不利になつただけ

爆発をさせた自分がピエロめく

自信作寄つてたかつてけなされる

東大阪市

斉藤 三十四

下戸一人すき焼箸がよくうごき

文鳥も床の間に呼び初宴

善人の義理は重たいものを知る

コンピュータに義理と云う字をのみこませ

鳥取県

川崎 秋女

松の内せめて笑顔絶やすまい

六十の妻に六十の女の香

あの森が目印実家への道急ぐ

音たてて崩れた愛をしかと見る

鳥取県

林 露杖

元旦や老いには老いの夢を抱き

梅一輪咲かせて生きし古徳利

妻の留守妻の手順で立つ厨

黙殺という手もあつた言わせとけ

米子市

八木 千代

祈り深い聖夜にさせて雪もよう

若水で磨いてみたい石拾う

きさらぎの海のやさしさ不安なり

下り坂のリズムわき目も許されぬ

柳井市 弘津柳慶

屠蘇のない新春佛壇へ香かおり
喪中でもせめてガラスは磨き上げ
延着へ見送る方も気が抜けて
満員車座席の娘よく睡り

竹原市 時広一路

これだけの絵馬だご利益ありそうな
義理人情僕も年寄組なのか
噛みしめていいる喜びよひとり酒
哀しさを誘う酒なら詩になる

岡山市 時末一灯

救急を横目に初詣をいそぎ
豪雪の年明け惰眠を揺さぶって
目覚めれば思う三十年前の悔い
耐えた日を八方美人というてみる

倉敷市 渡辺苦句

ある日ふと家がでんでん虫に見え
銭という鳥を飼うのが下手な奴
詩に惚れた因果死ぬるまで惚れな
一億円拾った初夢みるとしよう

大阪市 清水健司

祝い酒飲んで仕事がかどらず
手相見に千円分の世辞を聞く
氏神へ行かずにみんな奈良京都
横文字の薬は母に効目なし

松江市 梅本登美也

貴婦人があらかた残すフルコース
病院の廊下が長い御臨終
種粃の工面に悩む冷害地
しんしんと出稼ぎ村を雪が埋め

江口度

少しうぬぼれがあり易見て貰う
どん底の横をチャンスが通り過ぎ
両当りまだ白旗はあげられぬ
ホールインワン考える寝正月

福浦勝晴

朝まだきふるさとで聴く鶏の声
腹立ちも入れ歯のせいで怒鳴られず
売上が伸びて社長のシャレも増え
先生をダシにくだ巻く謝恩会

岩井本蔭棒

弾丸除けると万病の隙間ゆく
満州で泣いた夕陽がいま沈む
長官のお叱り遥か雲の上
血流して得た平和とはこれかいな

長野文庫

上げ底と似たようなものハイヒール
騙された経験ある日役に立ち
おすし屋ののれん手本に寿の字書く
母のおかげ母を見下す子に育ち

大野酔夢

妻と子のいびきの中の歯の痛さ

島根県

あやとりの指が童話の彩を編む
夢捨てぬ五指たくましく点字追う
最高の演技で騙す泣きぼくろ

新宮市 大矢十郎

順々に嫁ぐそれだけを羨まれ
此の親にして此の子だと思ひ合い
Uターンさせて母さんが寝込み
文鳥の家出へ沈む老夫婦

奈良市 宮口笛生

初詣でせよと元日晴れあがり
北陸の雪をテレビでみるこたつ
土地の値に市街化指定の田を作り
百姓になり切る田の出来畑の出来

兵庫県 藤後実男

嫁いだ娘土地の訛りにはや慣れて
お守りを医師が笑っている回診
退院へ今年はでかい鏡餅

無人駅造花が色を変えており

松江市 柳楽鶴丸

猫に小判ブランデーナポレオン
教育が伸びちぢみ出来ぬ子をつくり
同情の苦痛を知ってやめにする
妻をびつくりさす付髭で帰る

島根県 西村早苗

あやまちのここまで過去として捨てる
ハンドルへ既に女の瞳ではない

音たえて陽はおだやかな春三日
むなしさをいっばいつめて師走来る

河内長野市 井上喜醉

起き上る力知ってる油虫
添えぬとも心の灯り消やすまい
自信過剰 人間性見失ない
痛い処突かれ信用宙に浮き

東大阪市 奥山添山人

古いも時に自省の天眼鏡
かさ高いと自分も思う日曜日
名優の血は争えぬ初舞台
方言が郷土料理の味添える

大阪市 柳原静香

ともかくも無事で過ごした日記閉ず
お年玉がもうケチれない孫の齢
燃えるものなく老夫婦の初春を酌む
血圧の母へ日向の道を選り

京都市 山本規不風

義理捨てた事には触れぬ賀状来る
気にかゝる易者の言葉が振り切れず
良い事の裏目を神が見せに来る
家建てたのになぜ兄さんよ早よ死ぬの

大阪市 本間満津子

老鶏も声張り上げて初日之出
開運の扉へ全身ぶつつける
捻子巻けばしばらく動く古時計

黙ってればよいのに美人しゃべり出し

岸和田市 狭間 希久志

席立った後が気になる低い声

五分粥になった知らせの息弾み

嘘を消すつもりゴムのゴムが見当らず

夫への睨ができず子等が真似

島根県 角 耕草

書初の筆が苦手は父のほう

書初の背すじ伸ばして子が座り

鶏鳴いてくくに帰ったなと思ひ

蓬萊山古び家運にゆるぎなし

大阪市 小出 智子

分身のように眼鏡を持ち歩き

人間にむなしさがある土踏まず

肉親がひとりずつ逝く風の音

百八つの鐘厳かに喪に服す

島根県 太田 亀甲

もう近い終着駅はどこあたり

あの人がこの達筆の記名帳

順番がもうきてよかろう宝くじ

床の軸ふりむきもせず帰る客

神戸市 山口 美穂

逢えばまた心が揺れて逆を言う

坂道でひと休みする市場籠

あいさつは今朝の寒さを白い息

意地悪な風が落した紅椿

喜怒哀楽纏めて廻る独楽の芯

文盲を笑う点字の博学者

二十円のはがきで届く人の義理

ラブレター愛のクイズを解くように

富田林市 中村 優

扁平足に日々吊皮があるばかり

社員食堂風格の人遅く来る

商社から電話お辞めになる噂

電話機でその日の笑顔見せる人

松江市 竹内 寿美

独り汲むとそに遺影が笑みかける

恋すてた娘に辛い除夜の鐘

ボーナスが娘の嗜着に化けて初春

御座興は少しはずれて的を射る

三重県 川上 溪水

正夢と思えば朝の軽い靴

曲げた背に過去が重たくのしかかり

喜びに変わる汗なら惜まない

コップ酒嫉妬の渦がまだ残り

出雲市 園山 多賀子

三猿の貌になれない老婆心

昨夜の夢の残った枕裏返す

子に賭けて虹の架橋いつ渡る

ライバルを意識した時揺れる旗

和歌山市 坂口 公子

木枯しへ福寿草が夢を見る

酒汲んで仲間と虹を追いかける

徳利を軍人墓地に置いて新春

星の降る山家で聞いている夜の音

和歌山市 西山 幸

翔べぬ西たちの吐息は詩にならぬ

いつか来た道だが虹はもう見えぬ

目隠しをしてどん底に生き残る

病むひとへ今日もきれいに敗けておく

岸和田市 原 さよ子

時にふと挫ける心へ師の言葉

過保護だと思いつながらも親心

ちよつびりの株新聞にあるスリル

移転した母校親しみ湧いてこず

岸和田市 古野 ひで

お雑煮を亡夫の好きな味にする

なんとなくよい事ありそう新春の雲

老いひとり手の足るところに薬箱

陶工の魂匂う花器の肌

八尾市 宮西 弥生

大阪の土に馴染めぬ北の雪

ゴキブリも地球の仲間として許そう

四季の美を見せる六甲詩の山

大阪の灯を見て疲れ今日も消え

青森県 五十嵐 操史

泰然自若と祖父は自慢のポーズする

嬉しさがこんなに続く夢にいる

仕来りに従いお神酒すすめられ

白鳥の先発隊が一羽いる

鳥取市 両川 洋々

夢一つ一つへ枕木妻と敷く

お茶漬けの湯気へ小さな罪を悔い

たたかいたを挑む眼のまま軍鶏が老い

くたびれた札できれいな夢を買い

八尾市 飯田 悦郎

その人の過去には触れない縄のれん

ひがみ合うことがつまらなくなる夫婦

仕合せな証し掌の皮厚くなり

柏原市 大峠 可動

愚夫愚妻天声人語の風に乗り

歯を病むと豆腐を好む庶民かな

春一番キャベツの価目に余る

寝屋川市 柴田 英壬子

梅ひらく山里マイカー寄せつけず

氷点下の朝も打ち水ご寮はん

ふたり分の食器洗うにゴム手はめ

和歌山市 内芝 としよ

天と地と人を結んだハーモニー

過去の音女は大事に抱いている

窓開けて今日の倅せ深呼吸

今治市 越智 一水

朝の海キラキラ娘がしゃべるよう

盆栽のよさがわかつて向きを変え
子ばなれがしてからわかるお茶の味

東大阪市 竹中綾珠

ランク付け孫七人にお年玉
年玉の札より銀貨好む孫
初場所の力士の気迫ほしい老い

和歌山市 若宮武雄

裸木へ無能をかこつ風の声
少年に凶とは神意なきみくじ
コンピュター信じきれないお賽銭

姫路市 梅谿庵不酔

妬く相手矢張りほしい夜もある
おこることグツとこらえた三ヶ日
又あいつ飲みすぎだろと見向せず

寝屋川市 宮尾あいき

神馬の人参食べすぎぬように高く売り
おみくじの悪い文句は信じない
良いばあちゃん一株を買う気のお年玉

大阪市 川口弘生

童眼に母は美人に映ってる
良い事がありそう鏡にも素直
酒樽へ漬物樽の劣等感

和泉市 西岡洛醉

耳鳴りへこんな持病がつきまとう
点滴にこの世の果てを瞬時見る
一服の清涼鷺の白く舞う

ポケットの手が賽銭を撰りわけ
文明の利器を白魔に嗤われる
風邪ひいた薬屋さんと医者で会う

鳥取県 福田保子

黒幕の何か練る日の人払い
薄給を任せられてる妻の意地
母の目は子のごまかしをもう見抜き

守口市 野呂右近

喜びの酒なら下戸の父も酔い
老いの腰かがめて厳しい風を除け
耳よりな話に補聴器掛け直し

京都市 都倉求芽

元日の新聞元日に見ておれず
戻ってきた賀状にお年玉当る
候補者の賀状一と目でバイトと判る字で

兵庫県 河原みのる

除夜の鐘ローンローンと響くなり
今のんは夢よとんだめる夢の中
大台は伏せて端だけを指で齢

高槻市 福田丁路

よそ目には金の成る木がある暮し
口も字もへたで誠意のある友情
老の坂登る苦勞のない時代

貝塚市 行天千代

さざめきもいつか跡絶えて除夜の鐘

八尾市 内海幸生

元日も葉離せぬいくじなし
お餅よりラーメンが良い孫であり

米子市

石垣花子

浪人の辛さぶつける試験場

福耳をもう受けついで呱呱の声

大部屋で又年を越すソバすゝり

奈良市

森田カズエ

随筆を書いてあまえてみようかな

大仏さまにお願ひしたいプラカード

仲なおりするきつかけを孫くれる

出雲市

板垣夢酔

付箋賀状悲しい貌をして返る

本物かテレビかサイレン風呂の中

浮気していいかと遺影にそつと聞く

大阪市

北勝美

めでたさはおせち褒め合う嫁姑

めでたさは愚痴を忘れた三カ日

程ほどへそれぞれ違う酒の量

大阪市

室谷徹舟

投函をしてから喪中の葉書来る

一年の怠けた分だけ暮れ忙し

身に余る光栄ですとうまいこそ

鳥取県

鈴木村諷子

おとなしう出たが内心すねている

人の世話でもする気にやつと成長し

年を年に見られとうないネックレス

加賀市 細呂木 魯木
仲人は希望を小さくしてまとも
大雪へただおろおろと老夫婦
合掌の出来る両手へ感謝する

羽曳野市

榎本吐来
当らない方の予報に賭けて出る
元旦を醜女の髪に乗るリボン
宿るいのちへもう母として語りかけ

東大阪市

桑原喜風
ジョギングに老い頼もしき持つファイト
長病みの妻に隠れた借りを持ち
救われた山英雄でないやつれ

岡山県

出原敬一
ほどほどの笑いでライバルと別れ
初詣客呼ぶ露店の幼な顔
水滴の執念蛇口に見る氷柱

鳥取県

金川満春
今年から平均寿命に成るゆとり
松風の音 檜山へ誘う音
吹雪く夜を笑顔の亡母が夢に佇ち

唐津市

新潟 回天子
年よれば寄つたで新春希望あり
新年は適量などと言うとれず
着飾ってお参りに行く孫の数

大阪市

神夏磯道子
しんしんと大地眠らす雪の降る

剝製の雉はいつでも空を向き

親戚の暗いニュースへ小さい波

姫路市

大原 葉香

子を預け母はけなげにベタル踏む

ピーポー車深夜をひとりかけ回り

降りつもる雪の白さよ神が住む

岡山県

直原 七面山

型紙に似た女

夢持たず寝正月

殺してと火の女

岡山市

花田 たけ志

家風からみれば不らちな今の嫁

大小の差があるだけと罪の愚痴

洗われぬ過去を知る目にいきまけず

西宮市

野呂 鶴汀

吊皮に今日の疲れをぶら下げる

柿の実へ一寸足りぬ背を惜しみ

上役の愚問を愚問とせず答え

倉敷市

斎藤 通風

悪友の擁護で定年職に就き

ひとの子をまずほめていて孫自慢

友の医者神でも拌めとおどかさ

大阪市

神田 秀峰

日程を組めども他所から崩される

住み難い大都会去り新天地

ごね得で常識外れの事件沙汰

花鉄音程でなく壺に入れ

考えの違ひ夫婦の気が別れ

望みある酒へ一日賭けてみる

枚方市

水野 弘

物価高忘れて今日も糸を垂れ

初釣りは隣りも赤ら顔してる

慕うてた彼氏も独りと知った夏

三重県

坪田 冬花

影法師だけは私を見捨てない

人間の知恵で野菜も狂わされ

詩心やっぱり母の血が流れ

和歌山県

中根 勇太

痛いところ突かれて嬉し子らの知恵

輪の中で角少しずつとれ始め

定年後朝寝の妻を起こしかね

岡山市

井上 柳五郎

新年へ抱負など消え父の老い

虚しくは生きぬ構えをすこし持ち

この仄でよいのか無為の日が暮れて

出雲市

吉岡 きみえ

安らぎの寢床に妻のまるい鼻

生きているかぎり残り火抱きつづけ

凍てつく夜心の隅の人を恋う

出雲市

石倉 芙佐子

鷹揚にうなづく程に頼れない

岡山県

岩道 博友

明日はもう忘れてしまふ小さい傷
船歌で男蝶女蝶の荷がとどく

大阪市 藤田 頂留子

引き直したい大凶というみくじ

合格へ今年こそはの初天神

飲食街おせちにあきた客の足

大阪市 黒田 真砂

靴の手をいとしく初湯にすかし見る

玉じやりに春躍つて初詣

今日生きた確かな印日記書く

下関市 国弘 半休門

足音をころして泥棒と間違われ

盛大な葬儀で音がしめっぽい

病院のスリッパ下駄箱で汚れ

八尾市 納糸 葉

喜びをみんなで分けるシャンデリア

一年の成長を待つお年玉

満ち足りてダイヤも毛皮も欲しくない

大東市 土岐 トク子

滞りなく済み結納花の宴

○・六カラット アフリカ土産に花が咲き

孫三才緋のお対の似合う新春

岸和田市 清野 こう

書く筆も丁寧日記の一頁

真白い日記へ夢が詰ってる

語り合う倅せ娘等の里帰り

和歌山市 松原 寿子

体当りする荒波に抱かれよう

出直しの駅で確かな切符買う

分別の涙の中に棲むあなた

岸和田市 島崎 富志子

太陽を追いかけて干す日曜日

有難さ母のお七が届けられ

娘が嫁けばこんなものかと夫婦酒

和歌山市 浦野 和子

神ごもる山へ鈴の音透き通り

音立て、崩れる石を積む夜寒

地球儀の何処かで軍靴の音がする

枚方市 稲葉 星斗

毛筆のめでたい賀状師を慕う

大ヘラの糸重々と岸へ寄せ

藤井寺市 中原 比呂志

シャンペンのかおあづけの受験生

受験児のベタルにあせりが見えて来る

金婚近し女房孝行思い立ち

医師の指示怠り一本飲み過ぎる

爪の垢煎じて呑んだら下痢をした

聞いているのか聞いてないのか生返事

快食快眠毎日が吉日です

伊藤 茶仏

屋根の雪の重さ反旗が欲しくなる

老い二人雪の蟄居になったまま
これからと言う除雪費が底をつき
空港も遅延列車は動かない
積雪にもんどりを打つお人好し

浜田 久米雄

口癖になるべくしようありがとう
三人のシャッターを切る気の弱さ
追伸に書くぬくもりがよくわかり
焼香の写真も一度見て下がり
うらやんでくれる年金ほどでなし

若本 多久志

天寿まで心静かに生き抜かん
意の儘に昼寝が出来る冥加かな
上に上あり他山の石とする
紫煙への妻の小言も耳に聒^く聒^く
嫁、姑知恵を集める物価高

正本 水客

眼を離すたびに自分が小そうなる
ジャンケンポしつぺ返しに似て非なる
無駄足をしたと磁石も北を指す
傍観者として聞いてやる顔になる
海は死にますか少しまだ嘘がある

川村 好郎

窮すれば通ずと教えられつつも
逆コース走ると女気がつかず
あわび一切れいくらになると思うまい

身におぼえあり別れのドラマ消す
なつかしき尾灯消えてから浮び

菊沢 小松園

坂道の途中で石も考える
土踏まず生涯恵まれぬ色である
抱きすくめる形に女の肩は出来
眼帯を外せる春の雲動く
息抜きに出した酒から揉めてくる

橘高 薫風

禅僧の描く円に似た大根煮
シクラメン伐折羅大将より激し
ぎんなんの水平線も遙かなり
水平線今にどんでん返しある

悼 戸田古方さん

香雪に氷明台は透きとおり

西尾 栞

自動ドア出て北浜の春の昼
戎橋一寸そこまでの人に遭い
ばてちゅうでテコのさばきの孫娘
虹の街大阪弁と河内弁
松竹座で待てば交番所がまとも

「川柳塔」の選者は四月号から
西尾栞氏に交代します。

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

野村 太茂津

風のように花のように生きたし

高橋 夕花

落ちるとき風の誘いにのつた花

遠山 可住

終止符もわたしの指で打つつもり

八木 千代

寂しさ。孤独。咲いて散るだけの人生、散らす風のような人生、そういうものが人間を思慮深くし、成長させるのは確かである。引つ込み思案で、手前勝手で、横着な人間には、風も誘ってはくれない。喜びや悲しみを分かちあえる、そして、ひとの為に力をかしてやれる心のゆとりと、周囲にぬくもりを感じさせる人間になりたいものだ。終止符も、自分の指で打てる強い人間になれるであろう。折れた矢が師走の街に落ちてくる

岸 本 無人

街路樹の落葉よそこは居辛らかる

大矢 十郎

紅葉狩り亡母が散つてるように見え

内海 幸生

秋風が吹き、紅葉した木々が美しく彩る頃ともなれば、人々は皆詩人になるらしい。そして師走の街に散り敷く落ち葉を見ると、土にも還れずアスファルトの上で靴に踏まれる淋しさを思い遣り、しきりに亡母を思う。本心を知りたし少しおこらせ

高橋 千万里

本音を出しあえるような、そんな友人が一人でも多く欲しいと思う。

酒を酌ぐ音がいちばん好きな音 堀江正朗
よい事を聞く耳だから掃除する 室谷徹舟
おそらく、酌ぐ音の前に、酒の匂いを感じたに違いない。そしてあの独特の酒を酌ぐ音である。その時の作者の幸せな顔が浮かんでくる。大切な耳だ、心の耳を澄ましておこつ。人情が乾くと犬も尾を振らぬ 谷垣史好
潤いのある温い、そして厚い人情が欲しいものである。世情は白らけている。
やさしい瞳私にとまどう事ばかり

岩田 美代

優しく熱い瞳に見つめられると女は戸惑うばかりであろう。

玉置 重人

代打が控えてるばやばやしておれぬ
定年を真近かにした人の心境であろうか、
かし肚は既に決まっているのだ。
呼び捨てに叱ってくれる者も絶え

小砂 白汀

こんな淋しい不幸せなことはない。自惚れ

はなければならぬが、それ以上思い上がって
くると、叱ってくれる人も居なくなる。

これ以上追うと極がすすり泣く

逆縁のいずれは会える星の牙え

大田 美乙女

自分を騙してみたいと思う昼の月

中川 滋雀

死に別れたひとを、何時までも追ひ縋ると
本尊も喜ばないだろう。いずれは会える宿命
を悟って強く生きてゆかねばならぬ。澄んだ
夜空の月は、冴えているが、昼の月は、いく
ら大きくてもはつきりしない。ふっと自分を
騙してみたい錯覚を起こすという。

河野 君子

真相を解けば疵つく人がいる 納 糸葉
他人の痛みがわかる人間になりたいもの、
疵つく人がいるなら美しい嘘で真相を匿し庇
うてあげたいものである。

とやあらんかくやあらんと嫉んでいる

上田 翠光

嫉んでいる、たしかにそうだろう、温い目
でそっとしてあげようではないか。
恙なく働きぬる目の風呂が好き

柴田 英壬子

なんと静かな憤み深い一刻であろう、お人
柄が偲ばれるこのひとの心境。

一つ荷を減らして紐をしめなおす

西山 幸

双肩の重荷のうち一つ減らした、さあこれ
から身も心も締め直して人生の石ころ道を力
強く生きねばならぬと自分に云い聞かせる。

川柳 太平記 (34)

素行堂松鱸と大阪柳界

東 野 大 八

初代川柳以降、川柳は一時江戸句と称され、たほど柳樽中心に江戸でその盛況をほしいままにした。この間、上方の川柳はどのようなものであったか、浪速川柳界の重鎮ともいわれた素行堂こと板倉松鱸に触れて、以下述べたい。

まず江戸側からする関西側を「上方」と称したのは、家康の江戸開府にはじまる。江戸は太田道灌の居城の頃は、単なる戸数二十余戸の江戸宿に過ぎなかった。家康は、秀吉に臣従したころ、関八州の管領として八百万石を領し、この地を拓いた。そして豊家没落を機に、上は禁裡より下は三百諸侯に至るまで政治的に天下を統一する征夷大將軍の本拠として君臨した。

何さま全国三百余侯、二千八百余万石を配分する將軍の都府江戸は、かくして三百諸侯が江戸屋敷を構え、江戸常住の幕臣に加え、参勤交替による諸侯の家族の居住化がみられ、いわゆる武家階級が構成する一大覇都と変じ、膨張一途を辿った。いわば上方に対する新興都市であった。

このように一大都市化を形成するには、当然上方の政治・経済力に依存したことは当然である。京、伏見、堺、大坂方面のいわゆる上方は、日本の首都江戸建設にあたっては全く切り離せない存在であった。一口にこうした形態を要約すると、江戸は武家の舞台であり、京都は禁裡中心の公卿の都であり、大城は商人中心の一大商都であったわけである。

なぜ大坂が一大商都であったかといえば、その繁栄の唯一無二の条件は「米」にあった。米都大坂は、秀吉の豊家全盛の拠点の頃より、海運の至便に乗じた米の一大集散地であった。武士階級の生活の糧は、その石高が示すように扶置米が基本であった。その米穀依存の米そのものと米との換金の取引を握る蔵元はすべて町人の商人達であった。豊家も徳川家もかくして米都大坂は、いわば生きるための拠点であり生命線でもあったわけである。さてその大坂だが、その殷盛さを裏づける海運の冥加は、大阪の市章が航路標柱で象徴するように、糧米舟の運行は海路にある。よって大坂市民は、新古今集の「難波江川にわえ」の歌章にちなんで、浪花・浪速・浪華の別称を唱えた。また伝統の「大坂」を、坂は土に反するという忌名とあつて明治六年「坂」を「阪」と改めた。(以上大阪市史)

前置が大変長くなったが川柳に移る。

そもそも川柳の前身前句附の発祥は上方である。そのルーツは泉州堺の池島氏成之が万治年中(一六五八)に六句附を発案し、それが京二条の高瀬氏梅盛公に引継がれ、それが上方で盛んに行われた。(俳諧高天覧) この前句附の流行は、その指導書ともいう

べき入門指南の高点附合集を、商魂たくましく出版界が着目し、この会所本を繞々と板に乗せ、上方一円から新興都市江戸の出先を通じてさかんに販路を拡げた。江戸における「俳風柳多留」の刊行はこのブームに由来する。

勝句披露のこの会所本は、綴本または一枚刷りの各様があり、その一枚刷りが万句合の板行を意味したわけである。この附合集の板行の最初は元禄五年の「咲やこの花」同六年の「難波土産」といわれている。この会所本は、横小本の体裁で、大阪の書肆雁金屋が中心といわれている。とにかく上方・江戸の出版業者の実態は紀田順一郎著「日本の書物」(新潮社刊)を参考とされたい。

大阪の書肆が板行した「俳諧馬たらい」(元禄十三年刊)を中心に、既刊本の板本を一部改変し、新版を装った改題偽板の類書本は往時、上方、江戸を通じ一万種を超えたとき、この俳諧書的一大氾濫が、後世の斯道の学識者の頭脳を酷使する結果となった。

俳諧の会所本を一例とする逞しい往時の出版業者の氾濫は、うけつぷりの凄じさは、これまで幾度も述べた。本稿でこれからとりあげる素行堂板倉松鱸は、あらかじめ断っておくが昭和七年刊の古川柳研究誌「三味線草」

の本田溪花坊詳述の数篇のものその他が参考資料である。

松鱸は飛騨高山市の生れで、地元の国学者田中大秀(本居宜長の養嗣子)に学び、医師を志し、青年期に江戸に出て医道修業の傍ら川柳四人見賤丸に師事し、その後大坂の三休橋付近に居を定めた。そして嘉永六年(一八五三)暮、大坂で病没。辞世は

— そこここが禪りと消る雪達磨 —

ただしその享年も法名もわからない。菩提寺は大坂天満の円通寺だが、過去帖もない。

没した翌年、社中が寄つて菩提寺で師小祥忌を催し、句筵を開いた集句が「梅柳吾妻振」とある。溪花坊が所蔵の松鱸の著作は

「俳風新柳多留」「狂句むめ柳」「滑稽発句類題」でしめて五十一帖ある由。

「俳風柳多留」に松鱸の句が初登場したのは、四世編の八十七篇(文政八年)の一句にはじまり、百二十五篇(天保三年)で終わっている。その間の多留への収句は二百四十句である。この記載中、百十篇(文政十三年)に彼は評者資格で加っている。

彼は在阪中、郷里に数度訪れている。恩師の門中や幕参のためらしいが、山間の小都市高山では狂句がさかんでその頃、狂句の「新

良木会(あららぎとよむ)が在り、嘉永二年には、鬼尿・成之・里鳥・こまめ・川柳評などの五流連の句会が催されているが、松鱸の句も句評の記録も皆無である。

「浪華柳多留」は、文政七年一挙に四冊が刊行されたところ。その原本は、俳風柳多留と酷似しており、異なる点は半丁九句の多留に對し、浪華多留の方は七句配列となっている点だ。六厘坊は「葉柳」二号で「浪華多留」は第二篇が出たかどうかは疑わしい」と三冊説を唱えている。この狂句本はまた奇妙なことに発刊関係者の名は一切なく、ただ序文に悠々館とのみしかない。もちろん松鱸抜きだ。

筆者は「時の川柳」(昭54・4)に「謎の百六十七篇」なる拙文を載せている。このことは世評の識者の常識では、柳樽は百六十六篇をもって廃刊されたことになっている。それがなんと百六十七篇が信州の山里で発見されたと溪花坊が発表していることだ。筆者はこの問題の「七篇」はどうやら松鱸の偽作とニラんだ由を記したものだ。この点「浪速川柳界の開祖」とする溪花坊の松鱸礼賛は、ひとり「三味線草」に止まらざる例証をあげて今もって疑点が去らないのである。(訂正)前号の星運堂賞は菅裏の誤りに付訂正)

俳風柳多留廿六篇研究

(一丁)

八木 敬一・鈴木 黄・石田 晋一
南 得二・小野 真孝・本多 正範
石田 成佳・大屋 六郎・多田 光

故岡田 甫

6 法官に着るむらさきハ殊勝也

八木 紫色を着ることのできた人は、一つは本句の高僧、もう一つは盲人の検校である。強欲非道な盲官の検校に対し、同じ紫衣でも高僧の着す場合は殊勝である、という句。

「法官」は、法印につき高僧である。中世は医師・画工・連歌師などにも用いたが、本句は僧位、法眼。

千両出さず着るのハしゆしやう也

僧正になって枯木に花が咲き 一九六一
二五・一

多田 贊。

岡田 贊。

7 御祓川一チ夜明ると法の声

八木 隅田川などでは、六月晦日には夏越の祓が行なわれるが、一晩明けると七月一日。この頃から川施餓鬼が始まり、読経の声、お題目の声が聞えてくる。

本句、武玉川に先行吟あり。

御祓川一夜違ひで法の声

小野 贊。

翌日からハ仏へわたす御祓川

多田 贊。先行句まで見付けられたことに敬服。

服。

岡田 同。

8 銭金ネの間夕に光る弥陀如来

八木 「銭」は寛永通宝に引っかけ、寛永寺をいい、「金」は金亀山浅草寺の金をとおり、浅草観音のこと。

句意は、寛永寺と浅草寺の間に東本願寺があり、その本堂には阿弥陀如来がさん然と光っているというもの。

南 贊。

銭金を左右に弥陀の本願寺

本多 贊。小生、当初は朝日如来を考えましたが、南氏引用の例句により、浅草門跡東本願寺は動かぬところと納得。

多田 贊。

岡田 同。

神国八人をたまさぬ琴の音

9

神国八人をたまさぬ琴の音

八木 川柳に詠まれた「琴に関する故事」は幾つかある。支那の故事は琴を使って人をだました事が多く、神国、つまり日本の故事は反対に人をだまさない故事が多いのである。だから、主題句は、日本は神国、神の国であるから、琴の音にまでも人をだますようなこととはしないのだというのである。

本多 間接的に華陽夫人と孔明を語り、神国たる日本を礼讃した句構と考えます。

あざむきし琴は屏風と櫓なり 七五・11

多田 賛。私は阿古屋だけを考えていたのですが、小督も入るかも知れません。「神国」などと大げさにいったのは「正直の頭に神宿る」などということが念頭にあるかも知れません。

岡田 賛。

10 顔にてりはの色もなくたつた山

八木 業平と同棲の女が、立田山を越えて河内国高安の女に通う業平に対して、

風吹けば沖津白浪立田山

夜半にや君が一人越ゆらん

と詠み、これにより業平は河内通いを思い止まったという。

「てりは」は美しく照り輝くこと、草木の紅葉のこと。

ちはやぶる神代もきかず竜田川
からくれないに水くぐるとは

の歌にかけて、立田……紅葉を暗示する。

顔を赤めてひどく亢奮することもなく、業平をなだめ浮気を止めさせた、という句。

顔に紅葉もちらさずに竜田川 四九・15

竜田川てり葉の色も顔に出ず 三五・15

多田 賛。

岡田 同。

11 遊女とハあんまりはでな化身ン也

八木 江口の遊女が普賢菩薩の化身であり、性空上人、或は西行法師がそれに会う、という伝説がある。

普賢様は化身なさるのもよいが、遊女とはあんまりはでな化身だ、というだけの句であらう。

げんじやう杜有べきに遊女なり

安五智 3

泥水に咲は江口の蓮なり 二八・25

ふげん様一トたびじりめんをしめ 二五・7

ふげん様はんぶへむきのよい濟度 二五・18

多田 賛。

岡田 同。

12 手もつけず折ルハけ高いかきつはた

八木 『伊勢物語』九段、

三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。

その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見てある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にするて旅の心をよめ」といければ、よめる。から衣きつ、なれにしつ、ましあれば

はるくきぬる旅をしぞ思ふ

このような歌を折句という。「かきつばた」を手で折らず、折句の技法で、カ・キ・ツ・バ・タと歌に折りこんだ、という句。業平は公卿であるから「け高い」といったのであらう。

かアきイツウばた成る程杜若

傍一・28

かきつはた歌人ハちぎりくよみ

七〇・22

本多 『業平は公家であるから「け高い」といったのであらう」とあるが、「け高い」は上品な意で、公家であるからではなく、手折らずに和歌で折りこんだのが上品であるというのであらう。

多田 賛。

岡田 同。

水煙抄

菊沢小松園選

弘前市 田中 叶

この指に止まらぬ奴が一人いる
法の目をドレミと男くぐり抜け
霊柩車油入れてる月夜かな
労働者だから生徒に殴られる
なにごとか隣りの屋根の雪が落ち

旭川市 朝倉 大 柏

例として話すピエロにぼくが似る
せんだんの双葉に重いランドセル
落書の校舎そのまま過疎となり
もうあとのない日の靴も光らせる

西条市 片山 明 水

ロマンスは母にもたしかあつたはず
補聴器を二つ明日から旅に発つ
刑務所の壁の高さの上に月

暦繰る女鎖が切れなくて

大阪市 大野 武 太

元日と云うに仕事の夢で覚め
元日も主婦をまつてる洗濯機
一年が確かにここに初もうで
風あがる風が欲しいと思う年

名古屋 越村 枯 梢

盲点があるから可愛い妻である
お多福のお面が笑うつけまつげ
風飄々それでも糸がついている
親亀の背中は大きいなと思ひ

岐阜市 市川 鱗 魚

子を夢に虹あたたかく抱きつづけ
窮鼠猫をかまねば生きる道がない
寡婦帯を解くと孤独が影となる

人妻の距離で見ているバラの棘

尼崎市 中 谷 利 美

飲みものにおの字をつけてぼったくり

こうなれば意地当るまで宝くじ

見覚えのない柄を着て妻の旅

定期継続まだ一年は大丈夫

鳥取市 森 田 熊 生

相槌の裏で逃げ道考える

言い過ぎたことにはふれず湯をわかつ

子の寝顔のぞけばのぞくほど素直

こだまもうひびかぬ山が削られる

今治市 矢 野 佳 雲

満点とかく赤ペンが見つからず

間違った靴は仇のよう穿かれ

野心もう捨てた仁王が門守る

辻棲が合えば合うたで妻不安

今治市 渡 辺 南 奉

善人だからすぐ合槌をしてしまふ

会者定離この人だけは放さない

あやふやな意志も含んで多数決

夫婦円満さほど対話のないままに

岡山市 原 田 凡 太 郎

この耳があるばかりに腹がたち

言うだけは言わせてもらい席を立ち

あきらめることも覚えてくれた妻

大阪市 津 山 刀 水

かげに呼んで叱る仲間のあたたか味

本当の親切口になど出さず

湯豆腐の湯気は企みなど持たず

大洲市 米 沢 暁 明

談論風発何も決定しないまま

エプロンをやつと外して母の初春

婦人科へ今日は男も用があり

浜田市 佐 々 木 裕

糲を選る老母へ減反云い出せぬ

一生の意気に感じたデスマスク

筆達者チクリと痛いところもつき

名古屋 鈴 木 可 香

ソーダ水女の顔が近すぎる

誤算とは言わぬところが政治なり

髪長くのばし事務執る顔でなし

竹原市 古 田 鈍 舟

傷心を硯の中にすりこむか

出来過ぎたカップルに吹くすきま風

御愛想のつもりで駄作へ印をつき

大阪市 小 谷 清 女

鶏も一息入れた寒卵

魂胆が有って若鶏太らされ

色眼鏡はすせば心見すかされ

大和高田市 岸 本 豊 平 次

韻々との闇からも除夜の鐘
育児書を読まず育ててくれた母
一億分の一が一億円拾い

鳥取県

武田照子

音のない音が知らせるぼたん雪
まだ許されていなかったのか言葉尻
ひとり居て一人だけなるわたはこり

島根県

松本文子

ひたむきな女に虹はきれいすぎ
哀しみを上手によけて白い足袋
わびしきにつかむ電話も話中

米子市

桑原伊都

橋脚が生活の流れに耐えている
たまご抱く自由も失せた養鶏場
停電に近代設備もて余し

京都市

松川芳子

春確か桜も蓄ためて待ち
張り合つて見ても所詮は蛙の子
見栄張つた分だけ軽い市場籠

倉吉市

今村夕路

猿たちは不安を知らぬ檻の中
針金で苦勞をさせた鉢の松
終戦でいつか軍神消えていた

鳥取市

武田帆雀

神様に近づく折れた矢提げて

うたた寝の妻が延ばした足の裏
大負けに負けて気の済むまで話し

西宮市

妹尾春江

箸紙の名前がふえて初春うれし
派手な色も一度手にとりあてて見る
ふんざりがついたか男喋りだす

大阪市

林ひろこ

嫁に出しなんと我が家の広きこと
野球帽よちよち歩きへもうかぶせ
箸よりも話が弾む同窓会

和歌山市

坂部紀久子

寒に咲く花の主張は曲げられず
遮るものないからお日様へ手を合せ
細かいのあるかと養錢までたかり

和歌山市

堀端三男

きっかけを知っているからばけて置く
赤信号きれいに別れる言葉撰る
青信号一呼吸おく齡となり

尾鷲市

渡辺伊津志

決められた角度で灯台海守り
起き上る型で間引菜箸に乗り
鈍行の駅は林檎が良く匂い

米子市

雑賀美世

おさげ髪天津乙女に燃えた日も
母の香が家中匂う大みそか

留守番も心豊かに鯛茶漬け

米子市 青戸美佐

鍋囲む湯気に話題がとけてゆく

新しいエプロン妻ははずませる

都会化の波畑までおしよせる

山口県 高崎喜一

冷害に野菜はどれもすねて出来

脱ぎつぷりよくて女をスターにす

宝くじ数字近づき又離れ

鳥取市 中森葉士人

腹立ちを押さえるお茶がぬるすぎる

贈り主美女ときめとく赤いバラ

強い子になれよ柔道着白く乾す

今治市 新居田胡顔子

偽りと思う話に乗る弱味

人影がびったりついてくる不安

子の城を邪魔せぬように寝正月

新潟県 高野不二

十大ニュースに迄さわがれる拾いもの

採算はこれで持つて寄付名簿

五人育てた乳房末っ子まだにぎる

鳥取県 和井観洋

少しでれつとピカソに似ていく雪だるま

吐く息が白い女の語尾荒れて

どか雪をよろこぶ若さが欲しくなる

東大阪市 開村武市

不退転晩学の灯は細くとも

べっちゃんこ母の寝窩を眼で撫でる

ひとり言一步退く父淋し

高槻市 竹内花代子

よく食べて文句を言うてまだ達者

三階の顔を雀が覗きに來

鶏鳴も聞かず酉年明けかかる

岡山県 池田半仙

バーゲンに妻エレキになってゆく

酒瓶に花をば活けてある飯場

新調の背広を着れば靴も鳴る

兵庫県 円増貞子

あらそいの声すぐ止んでゆきだるま

惜まれてあの世へゆきたしと思う

母の声着せた晴着の後から

京都市 山本桐下

五寸釘だから妻には打たさない

きょうも聞こえる孵の上の子守唄

外食の割箸気楽に夫婦持ち

東大阪市 三宅哲夫

花園を汚すべからず警視庁

つぶらな目日ごとかわゆさ増す小猫

封じこめられても開く水中花

八尾市 高杉千歩

足そぞろ最後の橋も渡り切り
正月の鰯一切れがまだ残り

長崎県 岩崎和子

春うらら年を忘れた顔になり

こたつから届く無性な知恵は湧き

大阪府 白石潔

メリケン波止場親に背いた少女A

三日程のわずらいで逝きたい欲をもち

鳥取県 加藤茶人

永田町で占う景気のいい話

趣味読書釣書に漫画とは書けぬ

大阪府 鍛原千里

待つことに慣れた女の薄化粧

カルタ取り重ねた手から春が来る

岸和田市 津田千舟

親よりも長生き古稀に手が届き

お互いに染めず隠さず共白髪

熊本市 成瀬月仙

治らねばならぬ貴女の千羽鶴

ダイヤ良く似合い品行良でなし

大阪府 堀口欣一

トリスきんつばピース私は生きている

男なりしよせんボルノは忘れない

羽島市 伊藤静枝

仕舞風呂ガス切る責をかみしめる

漫才も食傷気味なり三ヶ日

米子市 寺沢みど里

鶏へ卵目当ての愛そそぐ

車座の鍋に溶け合うわだかまり

米子市 政岡日枝子

湯気の中父朗々と満ち足りる

精一杯生きて首にもみる年輪

島根県 福岡芳枝

恥じらいもなくあくびする今日の幸

バーゲンでせめて女の夢を着る

東予市 小山悠泉

お気軽にと言う税務署が親しめず

よだれ掛け替えて地蔵も新春の貌

大阪府 西村英佐女

つまずいた足柔らかい子の若さ

舞いくるう雪にしあわせの春を見る

唐津市 木塚素石

みんなまで聞かずに走る年の暮

生きているしるしに今日も句をひねり

兵庫県 中田白李

美しい笑顔に財布油断せぬ

長電話の次は要用だけで切る

大阪府 吐田公一

蟹工船 多喜二の昔が嘘のよう

幻の影を慕いて古賀は逝き

大阪市 橋元美恵
自由とはこんなに淋しいものなのか
冬空にひとえの花が気負い立つ

兵庫県 藤原捷一
年新た井戸の車は音変えず
出直しへ髭はいらぬものと知り

和歌山県 天満三千代
原発の良否で一年暮れてゆく
和の中に生きて夕日のすばらしさ

唐津市 田中紫浪
一軒家そこにも車通る道
人の目をときどき引いて柿は熟れ

唐津市 仁部四郎
強盗も菊のバッジは置いていき
嗚呼平和児童手当という制度

唐津市 田口虹汀
今年も世話になる妻若う見え
孫の手をひいたつもりがひかれてた

唐津市 山下勝一
青刈りの田圃に雀出稼ぎし
つまみ食いその穴埋めに税を上げ

唐津市 桑原掬治
オリオンがわずかに昇る露天風呂
とり年も裸で鶏は街を行く

岸和田市 吉水照江

物価高師走の風と共に吹く
救急車自分が乗るとは知らなんだ

熊本県 有働芳仙
きりりつと捻子かけられて出る亭主
橋の端ばかり歩行者歩かされ

米子市 田中亜弥
父と子の意見の相違にお茶をかせ
温泉の湯気人情の輪を広げ

米子市 菅井未知
温泉あたりを労わり合うて冬の宿
見栄張った家でローンに泣かされる

島根県 岩田三和
にわとりのつもりで画いたアヒルの子
二合瓶酔うよわぬはご自由に

大阪市 平井露芳
電池切れるまで時計休めない
関取りの人気手型の数で知れ

新宮市 辻はじむ
故郷の星は膝迄降りてくる
八人目の敵が迎え火焚いている

岸和田市 福島せつ子
趣味の音いつもとなりへ気を配る
えべっさんに笑われそうな願いごと

泉佐野市 大工静子
五十年過ぎ忽然と文来る

ふんわりと仁丹匂う満員車

檀原市 西 本 保 夫

仕立ておろし着物へ女取りもどす
同窓会故郷の訛が生きて来る

米子市 野 坂 な み

囑託の親友にはきつい向い風
囑託の親友も苦勞の多いしわ

江津市 杖 田 よし昭

丑寅がまだ物を言う家が建つ
病名は聞かずににおこう寒くなる

倉敷市 大 森 登 竜

ティッシュペーパーに乗って特売日くる
草の寒氣へ九十九折なる土踏まず

鳥取県 羽津川 公 乃

太ったの痩せたのと言われ未亡人
頑固さが路傍の石にされている

寝屋川市 稲 葉 好 子

お茶漬けでよろめきドラマに酔っている
Uターン職より温い土が待つ

島根県 岩 佐 富 子

腰を焼くほどにあぶって吹雪見る
雑踏のどれも生きねばならぬ顔

青森県 岩 淵 一 星

倅は孫の晴れ着がまだ縫えて
神様がきざんでくれた顔のしわ

大阪府 藤 森 小 雅 子

数の子へ去年の怒り捨てていず
地球儀が今にも破裂する恐さ

島根県 星 野 侑 正

カレンダーに翔んでる女の赤い指
ベランダに自家菜園の春を摘み

豊中市 満 仲 きく子

ふり向けば亡母が居そうな千枚田
まだ着たい粹を鏡に嗤われる

高知県 赤 川 菊 野

風船と餅とわたしのふくれっ面
お年玉さらってゆく子と呉れる子と

堺市 田 辺 哲 寿

鴉のために少しみかんを摘み残し
大晦日妻の白髪も抜いてやり

今治市 八 塚 三 五 島

吸いすぎに注意やめろとは書いてない
譲り合ひしてる間に座られる

兵庫県 野々口 ゆう也

よく使った二本箸にも皺ふかみ
雑魚でよし雑魚雑魚なりにある安堵

岡山市 串 田 匂 味 地

ピアノの音生き方ちがう隣りから
街の灯を帰れば豆球待ってくれ

吹田市 藤 原 世 史 春

亡き人のよいとこばかり語る通夜
恐いのは儲けて握る医者ノメス

松江市

豊田巡歩

働いた蟻は悠々年の暮れ

兵庫県

奥野テル

デカンショの町で温もるぼたん鍋

寝屋川市

立床晴風

何食わぬ顔の裏側呑み込みめず

松原市

本多洋子

嫁姑 祖母の味まであるおせち

羽曳野市

麻野幽玄

本降りの中を走らす時刻表

八戸市

島田昭治

吹雪く日の夕刊の子に声をかけ

唐津市

浜本義美

樅の木を残し祖先の家を解き

兵庫県

山崎忠夫

出直しが出来る年なら明日がある

兵庫県

伊沢午朗

甘い汁吸った議員の顔写真

大阪市

山本炉斉

百度石年に一度の願いごと

交野市

山本テルミ

出直しのチャンス私に齢が無い

大阪市

岡田ふみ

嫁の手で厨はなやぐ鍋つかみ

尼崎市

中辻千子

反発の心に寒風吹き抜ける

大阪市

杉本智慧子

縁側の猫とろけそうに陽が満ちる

島根県

東原福子

収入に合わせた献立平和です

大阪市

村上喜代美

新年へ今年のプラン立て直し

高知県

山下登舟

道端に片目落して雪だるま

鳥取県

山内寿満湖

生活のリズムの中の音を聞く

「水煙抄」の選者は四月号から
正本水客氏と交代します。(二
月号六八頁の予告に川村好郎選
とあるのは誤りでした。お詫び
して訂正致します。)

先人抄

PART 1

句集「私達」より

(五十音順)

はじめに

川柳雑誌時代、麻生路郎句集「旅人」(昭和28年11月刊) 麻生霞乃句集「福寿草」(昭和30年7月刊)と三部作のかたちをとり、不朽洞会員による句集「私達」(麻生路郎選)が刊行されたのは32年1月のことである。すでに24年の歳月が流れた。その句集を入手することも殆んど不可能となっている。

ここに、句集「私達」を再現し、先人並びに、現在も川柳塔において指導的な立場にある同人諸氏の作品を振り返って鑑賞するのにも、有意義なことと考える。

紙幅の都合で、各位三句に整理させて戴いた。温故知新のよすがとなれば、これにこしたことはない。

(整理 香川酔々)

足立春雄

右顧左ベン俺は一体何処に居る

女湯ヘツカ／＼とヘツプバーン

心臓が持たなかったでけりをつけ

吾郷玲人

ノック聞き社長は伏せる「ホトトギス」

めし屋の子客と並んで朝を喰べ

ペン持てば男に還える章太郎

井上湧三

墨痕淋漓三人もいて読めませぬ

気の毒にギブスベッドの詩人です

おみくじを結ぶにうれし梅があり

市場 没食子

夏期講座みな居眠りに来てるよう

早いものだすまた来た赤い羽根の候

酒気帯びていたばかりに不利となり

伊藤茶仏

貴方まで味方ですかと妻むくれ

上役の近所に住んで使われる

喧嘩していても赤ちゃん生むつもり

岩崎一伸

良妻になれず女優の芸に生き

共学になって息子も針を持ち

奇遇だと何はともあれ酒になり

石川侃流洞

雨が降ろうと失業保険の支払日

都とはいいなバツタが金になり

伏字があるのは時代後れの本でした

石井高志

流しには余りに惜しい三味をひき

押しで行けと言った奴が失恋し

大衆の支持失うてスト終り

有働芳仙

盆踊りバレエの癖がちよいと出る

折詰のあぶないものは母が食べ

邪魔にされ大事にされて八十九

榎南夏六

空車馬も帰宅の顔をする

人間が嫌だとはおちぶれてからのこと

大雪だけを云い人が去に人が来る

奥村丹路

風よ吹け／＼風の中なるひとりぼち

そもその嘘の初めのゴム乳豆
ほろ酔いのおまえは赤き菩薩さま

尾崎方正

無理すなと云われた方が生き残り

腕時計戴くように視る薄暮

平均寿命が延びたと云うて呑んでいる

太田良子

奥様のへそくりをとて株屋が来

五分間だけ待ってとのお化粧し

拗ねてみて脈のあるのを確かめる

大坂形水

修身を抜け出た婿だ親が惚れ

自宅でも診ますとてらのまま診ます

子の病氣信心のない所為にされ

大西八歩

鐘つけば音は月までとききそう

打水は後追いかけるように打ち

スピードが好きなら早く死ねばよし

大西迷窓

短気とは別に心の温たかさ

青い眼の兄も夕焼を唄ってる

どんな用事が美人峠を越えて行き

大鶴喜由

子のカメラ俺と女房を引っつかせ

春来てでもまた春来てでも未亡人

国の母くればうどんでいいと云う

大森娛句楽

茄子の牛胡瓜の馬も漂える

栄転は左が過ぎてはばまれる

水車小屋市に編入は知らぬ音

岡村久志良

警察の手帖俳句も書いてあり

小姑が一番切れる鎌をとり

再軍備又糠パンを喰わす気か

岡田夜潮

倦怠期妻の無趣味に腹が立ち

貸本の中から異性の髪が出た

表彰は嫌だが洩れりやうら淋し

川村好郎

決戦下お琴の糸も切れたまま

妻の夏洗うては干し洗うては干し

途中下車ポスター程に咲いていず

河村瑞川

愚痴云わぬ人の強さが今判り

茶柱をそつと袂へ入れた母

皿を見ろと云わんばかりの刺身なり

河村日満

通信簿意地がないにも程があり

女房に値札の付いたまま渡し

紙切って見せて缺の包まれる

亀山晴峰

水族館うなぎの顔ににらまれる

人よりも大きく撞いて見たい鐘
宝くじ机一つで店が出来

金井文秋

愛人に頼もしがられ遣いこみ

皇太子のプロマイドとは世が変り

立読みの間に止んで傘忘れ

神谷凡九郎

おもむろに開く弁当箸がなし

アドバルンヘナ／＼とたたまれる

質札のぐつしよりぬれていた死体

北川春巢

頓服を上げますと医者あわてない

生字引英語違つたままおぼえ

お酒でも出せと病人気を遣い

木村孤浪

何やらんくわえてひよこ逃げ廻り

いい女街のピッチャー手が狂い

ごゆつくりにつまらなく済む宿のめし

木村十悟

保守系の親爺で一家恙なし

靴磨きブラシで客を差し招き

あくる日はとほける事にしてる酒

木村水堂

女史という妻をもつて不仕合せ

元も子も無くしてからの善後策

サービスもせずによきもちだけはやき

木村 千容

病い抜けしたのか接木思いたち
他人にはまさかと思う程やさし

先生はうちへかえってきけとにげ

木下 幽王

俗談と別な声してお経あげ
葉桜の頃に割勘云うて来る

もの云えば金が要るなりだから寝る

菊 沢 小松園

いい度胸本家の前へ店を出し
平常着で来たのがいつち泣いてくれ

いつまでも待つて居ますを持てあまし

菊 田 いさむ

考えておくと警察云うたきり
隣組しぶちんがいて寄附がもめ

喪服ちと借り物らしい坐りよう

岸 南柳

夕立ちへ遂に散髪刈ってゆき
人生に因縁と云うよい言葉

おのが無理通した後の淋しすぎ

黄 瀬 美 秋

落ちぶれて燈籠こけたままで売り
観光地岩一つにも気を配り

横着な方の鶏からつぶされる

黒 川 紫 香

日めくりは1と出ている大晦日

旅の雨しばらく女中が話しに来

ライバルにコーヒよばれる羽目になり

国 弘 半 休

上役を三振させた草野球
長女十七ブク／＼肥ってドウシマショウ

責任を終えた顎紐そつとり

小 西 無 鬼

信心の前を子供が走り過ぎ
名曲か知らねど夜業腹が立ち

老妻にくすぐったくも甘えられ

小 林 文 月

入営の朝小鳥にも餌をやり
靖国の神にあなたと小さく呼び

一応は蛍の光でケリがつき

小 西 雄 々

保険屋もいそいで去んだヒステリー
ポマードは二年前のがある詩人

綺麗好き猫の素足は気にかけず

小 池 しげお

松茸狩無理な所で踊らされ
土木部長案外肚のない男

新婚の当座はガラスばかり拭き

後 藤 梅 志

恩を知る点では犬にさえおとり
もげそうな釘へ電話帳をかけ

もう秋か古い門標見上げて出

佐 野 ト 占

同権論口の達者な方が妻
観光地ただで遊ばす様に書き

夜店の灯金魚の水にとけている

佐 野 白 水

混血児父母をうらまず聖書読み
君に貸す為めに蓄めてる金でなし

ジャン／＼横丁鞆ひつたくれそう

桜 川 不 水

まねき猫旦那の噓遠く聞き
風向きを測り賽銭放り込まれ

職場大会鰯を食った息で来る

酒 田 清 子

嫁ぐ日に子供扱いするも母
パトロールみんな起して遠く消え

試験前炭つき足しに起きてやり

阪 田 良 坊

処女作がなつかしゅうなる齢になり
旅馴れています駅弁次にする

無理やりに吞ませて後はうるさがり

清 水 白 柳

ペンキ塗立桜とんじやくくなしに散る
一寸した血はなめて置く大工の手

直線の素直さ伊勢の御柱

清 水 望 峰

娘の料理ハカリを近所からかりて

住みついて見れば名所もただの里
こおろぎの他は我が家へ来てくれず

新川 博也

表札もかえずおやじの一周忌
紅一点すごい拍手で立たされる
ふるさとの水母親がくんでくれ

下山 清潮

三男はさぼって伊吹へ行ったら
デパートを廻るに俺は持つ役か
宿題へ母の程度がちよとのぞき

直原 七面山

女学生乳房で春の風を押し
未亡人主人の箸で食べてみる
湯の宿で女になった箸をとり

杉谷 湖山

淋しさに線香立てる気にもなり
スナツ屋ごときに田舎者にされ
だしぬけに海の深さを子に聞かれ

相原 一善

お妾と一緒に猫も首になり
忘れ物だとキッスしに戻り
アベックを二つに割ってへビは行く

須崎 豆秋

速よいかな消えてしまふと火事見舞
ちちははにめぐりあいたや靴みがく
均一の中にさみしき荷風集

竹内 圭三
ああしんどかったと温泉から帰えり
宝塚歩けば妻がふけて見え

正月の酒に手がつく年の暮

田中 鳥雀

半襟を買ってやつたる人も老け
さし向い座敷が一寸広過ぎる
涙ほど女を強くするは無し

田垣 方大

歟の柄にあごをのせとる春霞
もう一度最敬礼をする賞与
人の道説いてて女難避けられず

高沢 一浪

焼場です否応なしに御出あれ
夕顔のたねとはつきり亡妻の筆
木石にあらぬ閣下の噂きく

高崎 雄声

樂をして喜ぶ中に我も居り
食卓に座れば母の声になり
宿の名も知らず団体ついて行き

多胡 春洋

川魚へ女房こわごわ箸を出し
不作でとちよつぱり松茸送って来
ざんげ録読んで検事も人の親

武部 香林

ローソクがホホホホと崩れたり

素足になって見給え春が来ているよ
人の道踏んで場末に生き残り

武部 若菜

欲も無き別荘番へ花が咲き
二人ずつ二人ずつ居る中之島
淀君の眺めた堀へ労働歌

伊達 堰子

師の恩にビリで出たのが発起人
秀才へ嫁がせ仕送りまだ続け
トンボ取りあれから恐れ池と知り

田代 尋四

締めたらと見たら卵を生んでいた
古井戸も覗いて見ねば気がすまず
停年と聞いて喜ぶ部下も居り

築山 快夢起

そのあした特価いくらの服でくる
金づまりまずロータリー脱会か
御先祖にすまぬ気もする帰化願

辻 圭水

飼殺しにするよな辞令出されたり
番茶一杯おし戴いた上司宅
初詣したばかりにすりに会い

津田 麦太楼

油虫まで男世帯を小馬鹿にし
同窓会から女房つん／＼して戻り
かつぎ屋のように田舎の母が来る

川柳塔 15周年

おめでとう会に出席して

白 岩 文 衛

大成閣のすぐそばで恵二朗先生と落ち合い会場に入る。開会予定の午後一時にはまだ少し余裕があったが、場内にはもうだいぶ沢山の方が集っておられ、あちこちで賑やかに挨拶が交わされていた。私の姿をいち早く見つけて、鬼遊さん、女さん、雀踊子さんらが大雪の中をよつもまあ、とても喜んでくださった。

受付に二三夫さんの姿がない。いつも「塔」の舞台裏にあって、黙ってこれを支えてきてくださった一三夫さん。あの美しい眉を私は長寿の相と見ていたのに……。

正面の一番後のテーブルが空いているのでそこへ坐せてもらおう。お隣りは上品な老紳士で、初対面のご挨拶をすると、この方は鳥取の加藤貞山さんである。鳥取市といえは私の所から車で一時間の距離、とても気安く思えて、いちいち無駄な質問などするが、一つ

一ついいねいに答えてくださる。私の地元柳社の悩みの一つである川柳人口の老齢化と新人発掘の困難さは、貞山さんの所では、問題になっていないようである。若い柳人がどんどん増えているとは、羨しい限り。でもよく聞いてみると、それにはやはり、そうなる理由がある。つまり重ねられているたゆまぬ努力には、ただただ頭がさがるばかりである。

「私は、川柳のエリートになり、素晴らしい句を作ろうとは思っていない。心に正直な句を、正直に作ろうとするだけ」。

「若い人たちには、どんどん進んでもらいたい」。

「私たち古い者が会をリードするのでなく若い人たちがやり易いようにしてあげるだけ」とおっしゃるその謙虚さが、「うみなり川柳」を伸ばしている秘密であろう。

「新聞柳壇を育て、その新人に言葉をかけ

てゆくのです」。

ともおっしゃった。私は、今日この会で感謝状を贈呈されるという私の師本田恵二朗先生と、全く同じお考えで、じみちに地方柳界を育てていらっしゃる貞山さんに深く敬服した。こんなお方と同席できただけでも、今日、雪の中を来た甲斐があると思った。山口の弘津柳慶さんとも初対面であるが、興味あるお話をつきつきしてくださる。この方もとても謙虚な方で、これが「塔」の社風というものであろうか。

午後一時、会は、柳宏子さんの司会で、生々庵理事長の挨拶から始まった。それは、先ず川柳塔十五周年を喜び、ついで、

「本田恵二朗さんへの感謝は、路郎先生から引き継いできたもので、あらたまったお礼の機会を今日得たものである」。

と述べられ、満場の拍手のうちに、恵二朗先生への感謝状と記念品目録が贈られた。そのお言葉の一つ一つに、誠実で、温かい、理事長のお人柄が溢れ出ている。

恵二朗先生は、これまたいかにも先生らしい和やかさで、(ちなみに私は、川柳はクロールよりも平泳ぎが似つかわしい文芸だと思ふし、恵二朗先生は平泳ぎの先生だと思っているが、今日も先生は、その平泳ぎで)

「路郎先生に可愛がって頂いた」恩返しと思ひ、十二年間「初歩教室」を担当させて頂いて、三百二十名の方と、恥も一緒にかかさせて頂きながら、楽しく勉強させて頂きました。ちよと十二支が一巡いたしました今年



(左から) 文衛氏・生々庵理事長・恵二朗氏・栗副理事長

を一つの節として、若い優れた選者と交代させてくださるよう、かねてから理事長に申し出ています。選者を交代してフリーな立場に戻っても、『塔』のため全力を尽くしてゆく決意に変わりはありません。とお礼を述べられました。

すると、川村好郎さんが立って、『恵二朗さんは私より若い。『初歩教室』は、会員も増え、益々好評である。選者交代などと言わず、もつともつと続けてもらいたい。』

と述べられると、一せいに拍手が湧き起って、恵二朗先生に引き続きその任に当って頂くことが決まりました。

私が、恵二朗先生のお導きにより、川柳の道へ入らせて頂いたのは、まだ『初歩教室』のない頃であったが、先生は「川柳とは十七音字で表わされる愛情である」といい続け、教えてくださった。そのお教えは、『初歩教室』でも、一貫するバックボーンとなっている。

私は、飄々と見える先生の中に、ゆるぎない川柳の魂を見る。その魂は、路郎先生のそれでもあろう。この魂を受け継ぐ『初歩教室』の柳人が、今後も更に増え続けてゆけることを、私は心から嬉しく思った。

ここで祝電が披露された。

大雪に出席をはばまれました。ご盛會をお喜び申し上げます。鳥取 小林由多香

川柳塔十五周年おめでとうございます。榮えゆく塔へみんなの力瘤 堀江正朗・芳子

元服の明日へはばたく空が晴れ 嘉数千代香

そして句会に入る。

「榮」川村好郎選、「音」西尾 栗選、この二つの兼題、選者とも、今日のために一三夫さんが準備し、決めておかれたものとか。なるほど、と唸ったり、うまいっ、と思わず叫んだりしているうちに、披露が終わり、懇親の宴となる。中国料理がどんどん運ばれてきた。

久米雄さんの音頭で乾杯。

瓢太さんの手品は、流石に洗練されたものだったが、洋服の女性お一人、と狩り出された夕花さんの思わぬしなの良い手さばきも、ヤンチャの喝采を受けた。

司会が酔々さんに替わる。亜成さんの河内音頭、一声さんの詩吟、太茂津さんの串本節、寿子さんの演歌、千代さん・越子さんのしげさ節踊り、と芸達者が続々くり出され、拍手歓声がわき起こる。盃もつきつき回り、宴はいよいよわけなきわとなってきた。

岳人さんのお心尽くして、恵二朗先生と並んで写真を、ということになり、撮って頂くうとしたら、生々庵理事長、栗副理事長もその中に入ってくださる。嬉しいことであつた。

その間に、メ女さん、日満さんの貝殻節、紅月さんの地づき歌、貞山さんの関の五本松と続く。ここで、新幹線の時刻のため席を立たれたる恵二朗先生を送って、私も出させて頂いたが、そのあとは、美幸ぶしの相撲甚句をはじめ、沢山の方の楽しい芸が続き、和氣あいあい、最後は、元軍人日満さんの、いかにも日満さんらしい閉会の辞で締めくくり、亜純さんの音頭で、川柳塔万才を三唱してお開きとした。と薫風先生が報らせてくださった。

めったに上阪できない私にとって、この会にはほんたに素晴らしい会だった。ただ、せっかく同じ会場にありながら、あの方にも、この方にも、お話を伺うことができなかった、と嘆くのは、せいたくと言うものであろうか。特に、北勝美さんには、丁寧なご挨拶を頂き

ながら、席を立たねばならぬ間際だったため
ゆつくりお話できなかったことを、本当に申
し訳なく思っています。

兼題 「栄」

川村 好郎選

争うて得た栄達はすぐ枯れる
振り出しは屋台でしたと廻り椅子
ひとときの栄えと知らぬ手を叩き
繁栄のはて座禪を組む心
こちこちになって陛下の辞をもらう

美 幸
千 子
小 松園

単身で行く栄転を危なかり
栄耀栄華の果てに中風で寝ています
栄転の背中合わせにいる定年
栄えてる商社の影で泣く庶民

久 米雄
史 好
花 梢

公害ものかわあわだち草の栄えよう
石だたみ続き栄華を偲ばせる
繁栄の願いによこれた招き猫
不景気になれば栄える戎さん

小 石
水 客
吸 江

嫁はんが偉いと栄える店をほめ
栄転とは名ばかり単身北の国
栄枯盛衰使った奴に使われる
栄光へ坂はきびしくなるばかり

雄 々
萬 々
瓢 太

印鑑の栄枯盛衰語る艶
(人偽りの繁栄緑の山削る
地枝々の栄えへ燃える根の想い
天いやさかの秘伝は水にさからわす

夕 花
千 子
紅 月

天 笑
好 郎
紫 香

兼題 「音」

西 尾

フルコース食器の音へ味は消え
恋猫が何か落した朝の冷え
シャンパンの栓伴奏な音でとび
和解した音作業場から聞こえ
福音の灯をろうそくはつけつつく
意気の合う音父と子の刀鍛治
カラフルな音で女堕ちて来る
さりげない風の音にも四季があり
豆腐屋が日暮れの音を持つてくる
飛鳥川の川音勧請縄揺れる
わが家の音でわが家の朝が明け
心臓の音をふたりに聴いて
目かくしの手のなる方に罫がある
傷口の深い男へ波の音
音感のにぶさを歳のせいにする
雪落ちる音に手酌が似つかわし
云い負けた手からお皿が一つ割れ
松籟を亡母の嘆きと聞く悔悟
オルゴールかけて静かにモカの味
古里の音が残っていた水車
高く低く太鼓の音がする土族
玉砂利の音から日本の初春が明け
不仕合せな女が聞いた針の音
風紋は風が残した音譜かも
ひと息をつくと雑音きこえだし
帯締める音うれしくも成人す
伝統の重みに音が消しである
見えぬ眼に音の世界が夢をくれ
枯山水の音なき音を聞いている
樽を割る音を拍手が待ち構える
テストハンマーの音全身を耳とする

天 笑
好 郎
紫 香

勝 美
茂 美
千 子
悦 郎
規 不
花 子
美 代
とし
智 子
萬 的
久 米雄
鬼 遊
滋 雀
岳 人
一 声
水 客
メ 女
吐 来
多 久志
悦 郎
亜 鈍
とし
雀 踊子
茂 雄
夕 花
天 笑
花 梢
一 声
史 好
久 米雄
紅 月

紫 香

銭太鼓落した音を意識せず
(佳)ふるさとの音を偲べは亡母の薬の音
(佳)音せねばせぬ隣室の音
(佳)心音が通い受胎の想い澄む
(佳)改憲論軍靴の音が聞えて来
(佳)騒音の中で静かな愛の手話
(佳)人宿がさらわれそうな波の音
(佳)エリートとして雑音に耳かきす
(天)玉音と云う名で聞いた負けいくさ
(輔)夜行性こんな音まで知って居る

紫 香

出席者 一山本規不風・大路美幸・岩本雀踊子
・香川酔々・中島生々庵・中島小石・野村太
茂津・笠原吸江・飯田悦郎・橘高薫風・川村
好郎・金井文秋・小出智子・斉藤三十四・浜
田久米雄・本田恵二朗・八木千代・弘津柳慶
・高橋夕花・横山一声・高鷲亜鈍・藤村重成
・佐伯越子・岩田美代・石垣花子・河村日満
・菊沢小松園・加藤貞山・垂井千寿子・植村
客遊子・内芝としよ・河合茂雄・中川滋雀
・西尾菜・高杉鬼遊・藤岡花梢・児島与呂志
・白岩文衛・板尾岳人・大坂形水・小西雄々
・里小路・北勝美・宮口笛生・清水健司・若本
多久志・津守柳伸・榎本吐来・塩満敏・上田
翠光・藤村メ女・谷垣好・松原寿子・稲葉
星斗・氏林洋敏・西田柳宏子・宮尾あいき
・正本水客・黒川紫香・若柳潮花・保西岳詩
・吉原紅月・村田瓢太・伏見茂美・高橋千子
・阿萬萬的・神谷凡九郎・河内天笑

紫 香

雄 々
美 幸
吐 来
千 子
三 十 四
太 茂津
笛 生
柳 宏子
雀 踊子
紫 香

紫 香

兼題 「音」

西 尾

フルコース食器の音へ味は消え
恋猫が何か落した朝の冷え
シャンパンの栓伴奏な音でとび
和解した音作業場から聞こえ
福音の灯をろうそくはつけつつく
意気の合う音父と子の刀鍛治
カラフルな音で女堕ちて来る
さりげない風の音にも四季があり
豆腐屋が日暮れの音を持つてくる
飛鳥川の川音勧請縄揺れる
わが家の音でわが家の朝が明け
心臓の音をふたりに聴いて
目かくしの手のなる方に罫がある
傷口の深い男へ波の音
音感のにぶさを歳のせいにする
雪落ちる音に手酌が似つかわし
云い負けた手からお皿が一つ割れ
松籟を亡母の嘆きと聞く悔悟
オルゴールかけて静かにモカの味
古里の音が残っていた水車
高く低く太鼓の音がする土族
玉砂利の音から日本の初春が明け
不仕合せな女が聞いた針の音
風紋は風が残した音譜かも
ひと息をつくと雑音きこえだし
帯締める音うれしくも成人す
伝統の重みに音が消しである
見えぬ眼に音の世界が夢をくれ
枯山水の音なき音を聞いている
樽を割る音を拍手が待ち構える
テストハンマーの音全身を耳とする

紫 香

兼題 「音」

西 尾

フルコース食器の音へ味は消え
恋猫が何か落した朝の冷え
シャンパンの栓伴奏な音でとび
和解した音作業場から聞こえ
福音の灯をろうそくはつけつつく
意気の合う音父と子の刀鍛治
カラフルな音で女堕ちて来る
さりげない風の音にも四季があり
豆腐屋が日暮れの音を持つてくる
飛鳥川の川音勧請縄揺れる
わが家の音でわが家の朝が明け
心臓の音をふたりに聴いて
目かくしの手のなる方に罫がある
傷口の深い男へ波の音
音感のにぶさを歳のせいにする
雪落ちる音に手酌が似つかわし
云い負けた手からお皿が一つ割れ
松籟を亡母の嘆きと聞く悔悟
オルゴールかけて静かにモカの味
古里の音が残っていた水車
高く低く太鼓の音がする土族
玉砂利の音から日本の初春が明け
不仕合せな女が聞いた針の音
風紋は風が残した音譜かも
ひと息をつくと雑音きこえだし
帯締める音うれしくも成人す
伝統の重みに音が消しである
見えぬ眼に音の世界が夢をくれ
枯山水の音なき音を聞いている
樽を割る音を拍手が待ち構える
テストハンマーの音全身を耳とする

紫 香

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

板尾岳人

子の風も葉直で食しさには触れぬ

山本 桐下

曖昧な現代世界にあつて、親と子のつながりの中の一条が寒空に舞う天と地の対話の中に親を想う子供のやさしさが表現されていて私の心を打つものを感じる。親にもたれて甘えん坊の子供の多い世の中に親の貧しさに触れぬやさしさを、作者の円熟ぶりを示す手際鮮やかなもので、少し硬い理屈もふくみながらリズムカルに流れ、盛り上がっている。

作者は京都在住の山本規不風氏と兄弟川柳家としても有名であり、仲の良いことも、うらやましく思う。昨年は京都から大阪本社句会に全出席もされ、句の円熟さが会場に響き渡っている。われわれもつかうか出来ぬものを身近かに感じ川柳塔のハッスル剤になって頂き共に勉強したいものだ。

おでん鍋ことと愚痴を聞いてくれ

森田 熊生

この句を読んでわれわれサラリーマンの訴えが底流に強く流れているものを感じ、わたしは何度くも何度くも、うなずいた。作者はいつも句の中に多角的な照明をこころみている。そして隙のない構成で組み立て、そつなく句の流れを本流に向けているが、やや裏目に出るフシもある。しかし不思議に魅惑的に夢の啓示から、次々と主題がふくらみ広がっていく。作者の若さと円熟ぶりに陽気でゆたかな想像力を見るものがある。一月の秀句鑑賞で小林由多香氏が彼の川柳に対する取組み方が違つとのべているように、彼も又、川柳家森田若人氏の長男で、鳥取うみなり川柳会の中にあつて、若手のホープとして活躍中でやがて山陰の次の次の指導者になるにちがいない。

袋小路と知らず選んだ道を行く

桑原 伊都

日記から生れたようなこの作者の暗中模索がまだまだ長い道のりを必要としているが、われわれ日常歩んでいる道を袋小路と見つめそれに気づかぬ人間のおろかさ、この句を読んでも、五七五の中に長い長い人生があるのだなあと陶酔の瞬間が何度か読みとれて、さすがと感心もする。

小さな割に大きな下駄の音

田中 亜弥

フーテンの寅さんってこんな人だろうなあと想像出来る句で、案外男ってこんなものだ。わたしも含めて、女性から見ると男性観はきびしいものだ。女房にはあまりいばらぬことにする。

落ちる葉は生れた樹など振り向かず

中森葉士人

わたしの好きな句の一つで、山を歩く時、大自然の中で色々と教えられるものがあるがきびしい自然にくらべて、人間の小さな、小さな欲はこの句を読んで捨てねばと教えられた。中学生暴力が問題の多い時、彼等を甘やかしたわれわれも悪いんだと反省せざるを得ない。川柳と云うより教訓句だ。

再婚の迷い鏡にのぞかれる

赤川 菊野

あれてる心を鏡に知らされる

政岡日枝子

女性と鏡、楽しい迷いと、淋しい迷い、鏡もいそがしくて、女性をなくさめねばならぬ鏡を主題にした句は作りやすくもあり、今まで創り尽されて来た感もあるが、やはり女性と鏡は切り離せぬもので、ここで少し角度を変えた鏡のみかたを考へるべきだ。

老婆は自動ドアの閉る距離

桑原 掬治

若い夫婦はともかく、夫婦ってこんなものかと淋しくもあり、もう少しかまっても欲しいと願うのはわたし一人だろうか。

又人を信じた貝が蓋を開け

武田 帆雀

追われてる男消ゴム捨て切れず

堀内 柳仙

善と悪、そんな気がする二句をくらべて、生きてゆくむずかしさを感じる。

■ 同人特集

女性同人一句集

大阪市 中島小石
けし粒にも似た人生を泣き笑い

大阪市 山川阿茶
飲みたがる男着たがる女 秋

大阪市 西出一栄
錦秋の候にさびしき薬瓶

岸和田市 内藤ささ子
コンバクトばちんと女気がかわり 岸和田市

高橋操子
舞妓さんの涙か京の五色豆

宮尾あいき
男とは可愛ゆきものよ酒に酔い 寝屋川市

久米奈良子
愛の実の南天赤き二月なり 東大阪市

天正千梢
夕茜釈迦涅槃図のかなしみか 大阪市

堀江芳子
島根県

同人雑誌「川柳塔」十五年の流れをふり返えり、活躍された多くの女性同人の華麗な作品群から、私が選んだこの一句を特集する。作者のおもいと異った点もあるが、これも一つの視点とお許し願いたい。

高杉鬼遊

(順不同)

夫婦箸いのちの音を軽くたて

富田林市 藤岡花梢

ひとり居てひとりの音に驚きぬ

大阪市 太田良子

すねて見たけどほったらかしにされ

大阪市 酒田清子

こよみでは早や立秋と母の文

西宮市 藤村メ女

雨垂れと居て雨垂れの面白さ

香川県 三井酔夢

そのむかし愛に溺れた雪だるま

堺市 高橋千万子

女ひとり自炊の水の細い音

ホノルル 加川カ口女

再婚のママは他人のようにみえ

芦屋市 丸川初甫

生甲斐をコップの底の泡に見る

敗けて勝つおんなの独樂のななころび
岡山県 嘉数 千代香

えらそうに見えても女は女なり
総社市 野々口 美舟

女ってだめねと男をだめにする
岡山市 川端 柳子

女が肥えて男が痩せて長い梅雨
富田林市 岩田 美代

子が笑う夫が笑う水いらす
倉敷市 小野 克枝

旅の町このままここに住めそう
米子市 八木 千代

家裁からパパの不馴れな手に抱かれ
堺市 伏見 茂美

何時もどこかで風が吹く世界地図
大東市 土岐 トク子

山の青野の青海の青と炎え
鳥取県 川崎 秋女

気短かな男の好きな冷やつこ
奈良市 森田 カズエ

三人へ傘二本貸す新世帯
豊中市 寺田 花宵

老二人秋刀魚二匹を焼く夕餉
西宮市 杉浦 婦美子

友引で娑婆に一日置いとかれ
大阪市 小林 トメ子

寿の袋にしては軽すぎる
八尾市 宮西 弥生

泥水を吞んできれいに咲いている
富田林市 本村 弥栄子

如何に夫を働かさんと菜を盛る
大阪市 河野 君子

一緒には死ねない夫婦茶碗かな
大阪市 小出 智子

ブーメランそんな夫にあきたらず
東大阪市 竹中 綾珠

三角がみごとな母のにぎりめし
岡山市 光好 陽子

悩みなど吹きとべ春の風だもの
熊本市 楠田 英子

一大事妻の誕生日を忘れ
今治市 小笠原 有里

投げようか蹴ろうか石が一つある
島根県 西村 早苗

おぼはんの十四五人も居りぬべし
豊中市 安藤 寿美子

玉ねぎを切った涙と言うは嘘
竹原市 鈴木 かつ子

次の世は人に成れよと蚊をつぶす
大阪市 藤田 頂留子

女世帯釘うつ音も板につき
島根県 中島 英子

岸和田市 神藤歌子
手のひらの上で思案のにぎりめし

岸和田市 雪本珠子
捨て切れぬ想いを秘めたペンダント

米子市 石垣花子
桃一枝抱いて流れる紙の雛

米子市 林瑞枝
隠岐航路墨絵ばかしの雪が降る

米子市 佐伯越子
独り飲む酒にわびしい烏賊の足

大阪市 神夏磯道子
切れかけた糸つながった結び玉

岸和田市 清野こう
天高く天女の舞か絹の雲

和歌山市 垂井千寿子
女三人ふっと話題の無いこわさ

富田林市 和田維久子
ひとりごとつる二月の風邪薬

大阪市 津守柳伸
実れない運命を知るカイワリ菜

大阪市 本間満津子
喪服にも地味の派手のと数珠の色

島根県 錦織文子
受験期が終って絵馬は眠りこけ

和歌山市 吉野富子
孤を愛す女に好きな秋の色

水見市 関美子
銀鱗に越中しぐれ 冬はかけ足

寝屋川市 柴田英壬子
立春や邪心を払う鯛焼く

八尾市 高橋夕花
かなしみの数だけちがうあね妹

和歌山市 西山幸
生きる日へちちよ父よと米を研ぐ

堺市 河内月子
思案する手からリングが逃げてゆき

大阪市 黒田真砂
しきたりと義理で重たい下駄をはく

和歌山市 小川佐知子
寝転んだまんまこれしろあれをとれ

島根県 大森孝華
掘りごたつおとぎの窓へ雪ぞ降る

和歌山市 内芝としよ
女は今日男は明日を考える

和歌山市 福本英子
もめている儘で旅立つ身ごしらえ

和歌山市 坂口公子
天高し体重計に乗ったまま

島根県 榎みどり
梅つけて女の四季の一つ終え

貝塚市 行天千代
気がつけば私は一人風のなか

虫の息それでも刑事ききたがり
岸和田市

古野 ひで

醜男の愛は一途に牛洗う
鳥取県

福田 保子

おひなさま昔話がつきませぬ
島根県

榊原 秀子

見えるもの見る幸せに花菖蒲
大阪市

柳原 静香

閑中忙孫のお守りを頼まれる
姫路市

大原 葉香

拗ねていて夫の好きな物を炊き
松原市

北野 久子

雛段のつけが実家をおびやかす
東大阪市

崎山 美子

やっと五十もう五十と振りかえる
岸和田市

島崎 富志子

飛びついてからをどうする青蛙
福山市

桑田 静子

鉢巻きをして集まると恐くない
八尾市

納糸 葉

鳴く夢も見ず標本にされた虫
岸和田市

原 さよ子

寝酒飲む女独りにいい月夜
松江市

竹内 寿美子

あなたは風私は毬で逢いに行く
和歌山市

松原 寿子

赦されて赦して見事なヤジロベエ
和歌山市

浦野 和子

迎え火を焚けば亡夫に出逢えそう
鳥取県

有田 とし江

円満に話が進み娘をとられ
岸和田市

林 裕子

朝顔と夕顔に似た共嫁ぎ
宿毛市

山本 窓花

母子草父の事へはもうふれず
宿毛市

瀬田 美知

枯れ一葉紅を流しておんな川
茨木市

吉川 米子

つゆ草の小さな藍へ思うこと
神戸市

山口 美穂

言う事を聞く釘きかぬ釘もある
堺市

大道 美乙女

どの花も愛しく買わぬままかえり
大阪市

西出 楓楽

みのる秋に見る半生のありがたし
松原市

泉谷 サヨ

会者定離遇えば別れる雲を追う
出雲市

園山 多賀子

花火師を裏切るものに不発弾
出雲市

吉岡 きみえ

泥染めの似合う女の瞳がきれい
岸和田市

高橋 幸代

愛染帖

橘高薫風選

ライバルのない道行けば流れ星

朱子市

八木千代

卵抱くなんと優しい鳥の瞳よ

和歌山市

西山幸

風と懺悔の長い長い夜

鈍行を乗りつぎ亡父に逢いに行く

朱子市

佐伯越子

なんとなく糸をゆるめて妥協する

倉敷市

水粉千翁

ここの雨あそこの雨の旅に濡れ

鳥取市

河村日満

食うて寝る生活もすこしずつ違い

倉吉市

奥谷弘朗

教養の割にゆとりが見当らず

大阪市

河野君子

花を贈う時の男は熱く大なる

大阪市

小出智子

漬物石を大切にきて冬を越す

高知県

松岡三吉

松の内どの娘も嫁に行けそう

京都市

松川杜的

万札も十円もあり願ひごと

京都市

松川杜的

三十六峰峰それぞれに初日の出

京都市

松川杜的

音のない音が近づく老いの身に
生きることも耐える事か老いの愚痴

倉敷市

田垣方大

嫉妬することを教えた春の風
花の芽がふくらむような高三女

町田市

竹内紫鏑

百億の仕事と答えヘルメット
全没に似て社長から来ぬ賀状

京都市

山本桐下

夫は砂わたしは水で花咲かす
陽だまりへ湿った石を蹴つてやり

京都市

山城修史

子に賭ける夫婦にあせぬ虹の色
ちぎれ雲君も暮しに疲れたか

綾瀬市

大山と金

初詣信心があるわけなし
損得の胸算段で義理果す

富田林市

岩田美代

白髪染もつ悪女にはなれませぬ

藤井寺市

児島与呂志

気晴しをさせるつもりで聞く叱言

鳥取市

両川洋々

ボタ山の風が栄華を語りつく

今治市

八塚三五島

新聞は敵か味方かわからない

青森県

五十嵐操史

断崖に立たされ夢の中にいる

松江市

舟木与根一

善人をあつけられんとさせ師走

岡山市

川端柳子

兵庫県

野々口ゆう也

青森市

工藤甲吉

雪は億兆の精霊乱舞する
のんのんと降りしからみの雪となる

高知市

西川富恵

夢幻かや雪燈籠に灯が入り

柏原市

大峠可動

人恋し人の形に紙を切る
鬼の子と知らずに遊ぶ花畑

兵庫県

遠山可住

雪の日に男を売った靴を千す
労働のいま叫ばねば風が止む

島根県

小砂白汀

風景がちがうハイヒールの高さ
風のない時に鳴る風鈴は泣いている

和歌山市

若宮武雄

能面をつけねば持てぬ外科のメス
春の譜が辛夷の枝に懸けてある

和歌山市

若宮武雄

憧れは市川房枝女史のしわ
ホーホケキョ春の女神の声と聞く

兵庫縣

辻文平

妻が死すどこまで続く薄氷

兵庫縣

辻文平

王女さまのお話ご馳走食べながら

兵庫県

中田 白李

月並な男に四季の花がある

名古屋

大林 曲ん手

人生の闇で仏が光り出す

尼崎市

黒川 紫香

墮落して女おにぎりつくれない

倉敷市

藤井 春日

気品漂う年始廻りの京舞妓

米子市

小西 雄々

政治的配慮で近道するという

八尾市

高橋 夕花

ご先祖のいのちを思う初灯り

岡山県

池田 半仙

プロイラーの命栽培されている

唐津市

仁部 四郎

長髪の手掌のうまいアナウンス

岡山県

直原 七面山

喜びや悲しみを知らぬ柱傷

岡山県

出原 敬一

かなしみへ離婚お見舞とは書けず

岡山県

嘉数 千代香

軍鶏に闘志をもらう冬

高槻市

若柳 潮花

北風へみの虫だけが楽しそう

鳥取県

鈴木 村諷子

朴訥な父母の遺産はあり余り

高槻市

田崎 あき子

テーブルの冬へよく合う桜草

大阪市

蘭

てんのじ村うだつ上らぬままに老い

土佐に舞う雪は陽気で移り気で

高知県

赤川 菊野

余生とはさびしきものよ囀の底

松山市

谷 真風

手のうちは見えすいて居る玉手箱

平田市

久家 代仕男

大物は只黙々と食べるのみ

西宮市

野呂 鶴汀

仇討を笑顔で挑む碁の敵

唐津市

木塚 素石

生活苦の日々の飛んでる昼の蝶

鳥取市

清水 一保

軍鶏の鶏冠するわし俺らが春

唐津市

田口 虹汀

長靴で雪さくさくと廻覧板

鳥根県

堀江 芳子

届かない指の向うは未知の国

島根県

堀江 正朗

縄のれん春の日銭の音がする

笠岡市

高木 桃里

切り札を持つ強みなやにやし

岡山市

井上 柳五郎

新妻が虹の明るさ提げて来る

米子市

雑賀 美世

タラップを降りれば別な風に逢う

堺市

大道 美乙女

真白い日記へ夢が詰まってる

岸和田市

清野 こう

ひからびた土鈴で人が呼べますか

今治市

矢野 佳雲

いとし子をあやすが如く琴を弾き

出雲市

板垣 夢酔

説明をしている暇に済む用事

今治市

新居田 胡顔子

寝返りで素敵な夢の流れ止め

島根県

榎原 秀子

ミステリーめくこと多き世の狂い

倉敷市

小幡 里風

尼寺へスポーツカーが停めてある

堺市

高橋 千万子

一方通行の話と知らず口を出す

今治市

越智 一水

悪を悪と言えぬ教師よ去り給え

寝屋川市

宮尾 あいき

音もなく舞う雪すがし初詣

京都府

都倉 求芽

うどん吹く間は女もだまつてる

鳥取県

和井 観洋

カラオケを持たすといつも憎めない

大阪市

白石 潔

風揚げのうまい少年に孤独をみた

羽曳野市

麻野 幽玄

野党から来た事がない年賀状

松江市

豊田 巡歩

たんぽぽもすみれも遠い花となり

岡山市

原田 凡太郎

平和主義また本心を言ひそびれ

米子市

野坂 なみ

筆跡へ性を見わけ恩師の眼

大阪市

藤森 小雅子

隙間風いつしか火薬の匂いする

富田林市

覆水が盆に返るか神の鈴

大阪市

晦日そばつけて赤字のしめくくり

島根県

追悼へ愛の讃歌がほのぼのと

倉敷市

三面鏡一つの面から噓拾う

島根県

思い出をかたくなにしてまだ独り

名古屋市

朽ちている仮令朽ちても縄梯子

大阪市

それなりのうたが歌えるコップ酒

八戸市

商売は上手趣味には一歩おく

和歌山市

心の鬘酒へゆっくり溶けてゆく

島根県

人生を方程式にあてはめる

熊本県

入場へ拍手おくれぬ義手かなし

宝塚市

三ヶ日大目に見とく酒びたり

米子市

自然破壊地球の青さ薄くなり

大阪市

画廊オープン心豊かな昼下がり

米子市

叩く手へ泳ぐ恰好で子が歩き

岸和田市

古野ひで

中村 優

清水 健司

東原 福子

斎藤 通風

西村 早苗

越村 枯梢

津山 刀水

小泉 紫峰

内芝 としよ

岩田 三和

成瀬 月仙

吉田 笑女

桑原 伊都

杉本 智慧子

石垣 花子

古野 ひで

落ち葉掃く老いに孤愁がしみてくる

和泉市

耳鳴りの気になる午後の静か過ぎ

島根県

点灯で生むまで鶏は眠られず

和泉市

国立へ行くに関所の一次二次

守口市

ある時の夫は妻の秘書になり

羽野野市

こつこつとライバル亀になつてゐる

米子市

たのまれの仲人の座でかしこまり

旭川市

妻の座を占るとゼニにしぶくなり

羽咋市

湯気にふとわが人生のドラマ見る

仙台市

暴走族に手古摺つてゐる平和国

岡山市

人間不信珍らしい花に眼をとられ

西宮市

新しい手帖に春の夢も書く

米子市

真中に割り込む稚気が愛される

貝塚市

初詣声に出さない願い事

浜田市

孫らしい強くて太い誤字脱字

佐々木 裕

七十が尚夢に見る青い鳥

兵庫県

奥野 テル

洛 醉

耕 草

岡 井 やすお

羽 原 静歩

塩 満 敏

田 中 亜弥

朝 倉 大柏

三 宅 ろ亭

川 村 映輝

串 田 句味地

妹 尾 春江

政 岡 日枝子

行 天 千代

佐々木 裕

奥野 テル

坪 田 冬花

田 辺 哲寿

速 水 房子

兵庫県

円 増 貞子

竹原市

古 田 鈍舟

竹 中 綾珠

東大阪市

片 上 明水

西条市

岩 道 博友

岡山県

北 勝 美

唐津市

桑 原 掬治

岩 淵 一星

人情の話ヤングの生あくび

三重県

人間のドラマ知つてゐる赤電話

堺市

盆栽へ水やれやらぬ老い二人

兵庫県

降り積る雪掃く夫の背の丸み

兵庫県

いい紙に出逢い活きてゐる墨の彩

竹原市

痛む所が毎日違う神経痛

西条市

補聴器を外して春の唄を聴く

岡山県

精進料理修業の坊主が運び役

大阪市

初午の太鼓へ太陽や高く

北 勝 美

道は川信号は堰暮の街

唐津市

四ツ折の紙幣は手帳にかくれて居

青森県

高き堀めぐらしなおも大を飼

唐津市

鋸目立て因果ふくめるように研ぎ

尾鷲市

一日の幸せ静かに筆洗う

大阪市

投句先

★

千500豊中市中桜塚三丁目13

橋高薫風

(ハガキに三句)

選句の苦心

若本多久志

句会の選者として一番むずかしいのは、類想句の多い課題との取り組みである。

失礼な言葉だが、ドンクルの背比べという着想句で、テニオハを替えれば同句になるようなものもあって、僅かな時間内ではなかなか優秀を決め難い悩みである。

本年一月の本社句会での「宝」の選もそれであり、披露の前にも申しあげたが、70%は「子宝」と「宝くじ」に集中していたのには閉口した。

ずっと昔の話だが路郎先生に「類句の多い場合の選句」について、ご教示を乞うたことがあったが先生は、

「まず、そんな課題を出した者の責任も大きい、僕の場合は……」と次の選句例を話して下さった。

当時八等身という美人の形容詞が流行した頃、場所はハッキリ覚えていないが地方の句会で「八等身」の選をさせられた。句箋をとってみると、背が高い、瞳がきれい、えくぼや笑顔が可愛い、滑らかな肌等、誰もがすぐ気付けく修辭ばかりにウンザリして、天に抜い

たのは

八等身 足の裏まで美しい

であった。又「自家用車」という兼題の時もほとんどが高級車からボロ自動車で、何処へ行つたとか、乗っている人物のさまざまな形態や、車を買った資金調達苦心といった同想句ばかり。そこで僕が天に抜いたのは

自家用車 チエンとんだりはずれたり

と庶民の自家用車への着想を非凡と見た訳だ」と淡々と語られたを今でも忘れない。

正月句会で、天に抜いた山本規不風氏の「ねんねこで……」や射月芳氏の「金銭で……」悦郎氏の「信じてる……」大茂津氏の「騙された……」たつお氏の「父の宝は……」等々は皆、前記路郎先生のご教示に従つてのユニークな着想を頂いた訳である。

秀句鑑賞欄に寄せて

直原七面山

一月号「秀句鑑賞」の塩満敏氏の句の取り扱いの秀拔さに私は心から敬意を表します。

例えば、他人の句に評者の誤った解釈があったとすれば、それは句主に對して誠に失礼なばかりでなく、秀句の真価を低下させ、その上、句の品格を損う恐れさえあります。

さて、終戦後いろいろな事情から、田舎の若者達が流行病に罹つたように、都会へ都会へと流れ出して行つた頃、農家では、跡取り息子を田舎に引き止めておくために、その頃はまだ不要であつた自家用車まで買い込んできて息子機の嫌を取つたものです。

その当時、或る大家が「引き止めるために農家の自家用車」と言う句を取り上げ

「戦友が久し振りに訪ねて来て呉れて……遅くなったから帰ると言うのを後で息子に自家用車で駅まで送らせるからと言って無理に引きとめ……」と評しているのを見て私は、びっくり仰天するとともに開いた口が塞がりませんでした。

何故なら、私は、佳句、秀句、名句と称せられるものは、評者を含む全ての人々に対して同量の感動と感銘を与えると同時に、同じ程度の共感と呼び起こさしめ、なおその上に句の解釈の面においても、同一の解釈を下すよう強要するとともに、規制するだけの秀れた句力と気品とを兼ね備え、併せて評者に対して余分の句評を付けることなど、敢然としてこれを拒否し、寄せ付けないだけの厳しさを持っていることを知っていたからです。

思えば、故麻生路郎師の名句「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」に果して鑑賞文などが必要でしょうか。

(なお参考までに、同一月号の三一頁に載つてゐる小出智子氏の「母の計を待つにはあらず秋深む」の秀句と、これに付された評文を今一度読んで見て頂ければ幸いです)

戸田古方さんを悼む

中島生々庵

2月2日朝10時頃、戸田古方さんが昨夜逝去されたとの悲しい電話を、戸田奥様から直接頂いた。目の前が真っ暗になって言葉がつけなかった。古方さんのご容態については毎月の川柳塔常任理事会で話題になりながら確かな情報がきかれぬままになっていた。私は医者の方として四年前発病され、豊中市民病院に入院当時お見舞した時から、容易ならぬ気がしていて、機会ある毎にそれとなくお体の調子をお尋ねしたり、時には時々きびしい語調でご自愛下さるよう進言したりしていたが、ご本人は頗る元気で句会は勿論、常任理事会にも毎回出席、遠い夜寒むの中を帰宅されていた。昨年8月、発声異常を訴えられて今度は大阪成人病センターにご入院と聞いて、全身悪い予感に襲われ、8月7日恐る恐る病院にお伺いした。ナース詰所で病室の番号を尋ね室に向かおうとすると、すぐ近くに聞き覚えのある古方さんの声が聞こえてく

るではないか。すぐ隣の患者休憩娯楽室でテレビを見ながら、患者同士で談笑中であつた。そのお元気なお姿には驚いたり喜んだり約30分間程もお話を交わして辞去して来た。それが私にとっては最後のお別れとなつてしまつた。

その後まもなくご退院と承り、ご経過の順調さに、私の杞憂だつたかと安堵もし、自分で自分を慰めていた。ご自宅での静養に漸次快調となられていたのに、時候不順もあつてか、少しお工合が悪いとあつて1月27日に再入院され、加療に専念、奥様はじめお家族のお看護によつて危機は脱せられたような感じが持たれる程、ご気分もよく、2月1日は夕方7時過ぎ、奥様も安心して所要をすまし帰宅された由である。それに何ぞや。奥様がお宅に着くか着かぬ時刻に急変が起つたとの通報にて奥様が駆けつけられた時は、すでに幽明境を異にして大往生だつたとの事。それにし

てもお家族のご悲傷は如何ばかりか、恐察するに余りあることである。

私思うに、若い頃から一心に親鸞の教を深く奉じていられた古方さん、従つて生死に對する大悟道に達しておられた古方さんと、かねがねお見つけしていた私にとっては、立派な古方さんらしい静かな大往生だつたように思われてならない。

更に遠く追憶すれば、路郎門下として古方さんは昭和14年来、松坂クラブからの同期生であり、先輩に恒明、耕二、貴山、翠光、香林、文蝶などの先輩がいて、賑やかでたのしい勉強の道場であつた。当時古方さんは孤蓬と号しておられたが、京大の経済科で経済史を専攻せられたその学識は広く深く、それに大阪は船場のまん中で大家の一人むすこととして育ち、いつも微笑をたたえた温顔は、接する人を魅了せずにはおかなかつた。うべなるかな路郎先生も殊の外愛護せられ、所謂まな弟子中のまな弟子であつた。われわれ門下生が路郎先生に、おねだりをしたり、又は叱られそんな難かしい事件の時は、常に古方さんを第一線に押し出し衝に當つて貰うのが常だつた。

それから四、五年たった昭和21年、古方さんや好郎さんと共に諏訪森で川維浜寺支部を

思い立ち、夜おそくまで、ピラはり等をして
PRにつとめ、同好の士を集め、路郎先生も
ご臨席下さってご指導を賜わり地域の人々に
も共感を呼び、だんだん盛会になって来た。
その間の古方さんは作句だけでなくその精進

弔

辞

謹んで、古方さんの御霊に川柳塔社一
同を代表してお別れの言葉を申し上げま
す。平素から物やわらかな話ぶりで、如
何にも御大家のお育ちそのままの貴方が、
春まだ浅き如月の今日、川柳句帖とスケ
ッチブック一冊を持って、いとも静かに
黄泉の国へ旅立たれました事は、我々川
柳塔社一同の哀しみでも哀しみでも哀し
みきれぬものでございます。

昭和十四年、故麻生路郎先生の松坂ク
ラブの川柳塾生として入門されてより、
今日まで四十有余年の間、川柳の道に励
まれ、或る時は川柳日本史、又は川柳世
界史等の詠史川柳に独自の境地を拓かれ
昭和四十年、川柳塔社創立と同時に塔社
同人となり、常任理事として活躍され、

は浜寺支部に対する力の入れ方と、川柳に対
する情熱とで周囲の人達を引き入れずにはい
なかったのである。路郎先生なきあと川柳塔
となっても常任理事と編集部長を兼ね大活躍
して頂き今日に至っていた。ただただ痛惜の

又、路郎先生の七回忌御法要には、委員
長として、東奔西走その細微の衝にあた
られましたことは、今なお我々の感銘し
ているところでございます。

貴方は又、絵画を良くされ、常にスケ
ッチブックと絵筆をもっておられ、寸暇
があると、窓からの景色、又は会場の風
情等、即座に軽妙なタッチで画かれて、
私達は感心して見とれておりました。

又、御酒を愛されましたが大変良いお
酒で、すぐに愉快になられ、奥さんとの
仲の良いお話を我々は手放しできかされ
ました。

昭和四十七年発刊されました古方句集
の中に

ぬくみうれし妻の敷寝のズボンはいく
門口のキスは頬べたですまされる
信じられ信じ合つてゐる其白髪

等、羨ましい情景が散見されるのであり

至り。

ご冥福をこころからお祈りする次第である。
路郎先生とご一緒に、川柳塔をお護りお導き
下さいますように。

合掌

ます。

仏の道にも御造詣深く、常に悟ってお
られたようで、無寿量と題された句集の
中に

足るを知る日向のなかにいるぬくみ
日が暮れたらねるんだったね老子さま
等の句が第一頁に書かれております。

我が国川柳界から、最もユニークな作
家である貴方を致したことは、悔みて
も悔みても悔みきれませんが、お別れせ
なければなりません。

古方さん、お心安やかにお眠り下さい
ませ。

川柳塔社一同、謹んで、あなたの御冥
福を心からお祈り申し上げます。

昭和五十六年二月三日

さよつなら

川柳塔副主幹 西尾 栞

未来永劫梅咲く頃の哀しさよ

栞

半 生

小砂白汀選

半生の疲れ円満とも見られ 大柏
がむしやらに走った半生悔はなし 日枝子
半生の苦勞へ伴侶の温い指 洛醉
半生はぼんぼんだった不倖せ 与根一
半生の汗を集めて兎小屋 義美
先妻の子に半生をかけて去に 虹汀
十字架を背負う半生義手疼く 茶人
夢追うて来た半生をふと思ふ 美穂
人生の半ばになつて恥を知り 七面山
苦勞した半生見せぬ母の笑み 寿美
走馬灯我が半生の夢の跡 綾珠
書き替へをして飾りたい半生記 胡顔子
主人との半生幸福の部にはいる 綾珠
動続賞わが半生にただ一つ 優
半生の苦勞を皺はかくさない カズエ
半生を語るにうまい酒が要り 博友
嬰鑠の古稀半生とする氣炎 どんたく
反骨の父半生は自我を捨て 弘朗
半生は神に捧げた修道院 登美也
くすりの香染みる半生から脱し 柳子
人生の愛着半生過ぎてから 代仕男
それなりの半生だったとも思い 凡太郎
半生を語れば愚痴にとられそう 素身郎
半生の中に消したい記事がある 不二

向い風いたわり合つて来た半生 軒太楼
半生をまかす流れが瀬にかかる 一路
これからと言う半生に灯をともし ひで
半生の風紋もろく消えてゆく 福子
半生を賭けたつもりの子が背き 秋女
半生を匂わせ梅のまだ老いず 道子
半生をかけて近道ないと知り 文平
石を積むあと半生を崩すまい 三和
半生へ付かず離れず妻がいる 洋々
みの虫として半生はぶら下り 芳明
半生はガラクタの山這い上がり 青仙
半生を素顔隠したままビエロ 方大
嫁ぐ娘へ半生かけた想い抱く 秀子
人
分校に半生親と子を教え 佳雲
地
半生を捧げた神は猫背なり 掬治
天
これからの半生やまびこだけが知り 可住
軸
半生は害虫だった大揚羽 可住

粉

菊田 いさむ 選

粉ひきの唄を十八番とする老婆 裕
粉雪が北風にのる師走冷え 正純

石うすで母が気長に黄な粉ひく 登美也
身を粉に稼いだ自慢の父の指 柳五郎
花粉背に石仏のひそと付つ 刀水
白い粉の魔力人間もてあそぶ 洋々
幼な兒の肌に親しむ天花粉 七面山
メーカーの洗剤びわ湖に裁かれる 優
春はまだ粉雪が舞う無人駅 素身郎
はち切れる裸祭りへ舞う粉雪 本蔭棒
乳首へつけて飲ませる粉ぐすり 春日
媒介を蝶に頼んでいる花粉 勝美
降りかかると火の粉を浴びてお水取り 秀峰
白い粉がふくまで待てぬつし柿 里朗
末端価白い粉が云うトツプ記事 風
白い粉骨までしゃぶるとは見えず どんたく
粉ふいた柿が田舎の軒飾る 喜一
粉挽屋訪えばのぞかす粉の顔 秀子
鉄粉にまみれ線路を守る石 一路
フロントの飛び散る現場へ救急車 芳仙
粉を練る指伝統の味を出し 洛醉
粉ぐすり咽喉に通つたオブラート 道醉
身を粉にしてもローションにまだ追われ 喜醉
粉わさびちと効き過ぎた妻の愚痴 文平
金粉で書く寿へ娘を托し 可住
ボランティア身を粉に働く尊とさよ ひで
粉雪の舞う下に春待つ妻がある 秋女
麻薬Gメン必死に白い粉を追ひ 悠泉
粉ごなに壊れて届いた塩せんべい 綾珠
熱っぽい顔で粉薬り咳にむせ 代仕男
転作の地粉でそば打ち歳を越し 峰雪
粉飾をしてまで首の座を守り 軒太楼
身を粉に働き同志コップ酒 義美

慕
う

伏見茂美選

討入りの舞台粉雪舞うている 虹
粉雪は積りますよと酒にする 素
白粉のように降つて寺の庭 回
聖職という白墨の粉まみれ 佳
粉ひきの唄のことと水車 佳
粉雪かも知れぬ明日の義手疼く 雲
粉チーズかけるとこだけ嫁の味 人
粉雪に明治の恋がある蛇の目 道
製粉も献上そばは秘伝の秘 宵
白粉を惜しむではなし健康美 柳
白粉でピエロは知性をぬりつぶし 枝
天 日
金粉に映る華燭の幸にいる 大
粉雪に 南天の赤美しい 柏

年下を慕う女は紅を引く 夢
慕われて迷惑がつて人もおり 勝
慕われて無いらぬ定職ない男 醉
可も可も無い凡人で慕われ 方
母慕い鍵っ子の待つ日暮れ時 大
先生を慕う少女の微熱かも 胡
慕う影走馬となる夜の長さ 子
先生を親とも慕う施設の子 富
人間の弱さ故郷恋しがる 里
慕うのはやはり度胸のある課長 風
孤児院のママとも慕う小さい手 秀
慕われる人柄角がありません 子
老いの背の温さを慕う日の続く 一
学風を慕ったことにする名士 路
神慕う心の傷が疼くとき 保
慕われて困まる師弟の間柄 保
慕うたと思うた背なへ詫びが来る 夫
運命が変る予感がして慕う 夫
先生が好きならばかり一年生 三
慕われた分教場の嫁きおくれ 和
慕われているとは知らずうさがり 洛
自炊して慕う故郷の母の味 醉
反骨のむかしを恥じて師を慕う 伊
古里を慕うて犯人舞い戻り 津
慕い合う老いを神様茶で結び 志
かしずいて母の諭しを慕う日日 道
慕われて教師僻地に落付く気 喜
慕われた男は壁を知りはじめ 平
懸命に目立たぬ花が慕う蝶 規
隙のある叱り方する父慕う 不
出稼ぎが酒に故郷慕う日々 風

トラップで占う人も出来たよう ふ
師を慕う拳の裏に見た涙 茶
算盤を弾いて慕うこととする 三
もの言わぬ娘となり父を慕う日々 五
親慕う寝言聞いている施設の灯 島
大胆な女の慕情こわくなり 秋
そつと手を握つてしまった酔っている 女
方言の混じる恩師の目が温かい 實
クラス会過ぎにし思慕も語られる カ
慕われる男の眉は太く張り ズ
ぬいぐるみ少女は淡い思慕を抱き 美
慕う人まだ居りません脛かじり 穂
慕情しきり風の便りを待ちわびる 大
慕う人出来てゐるらしい日記帖 柏
天 里
慕う気が妻にあるからあたたかい 風
軸 弘
慕うほど男前ではないけれど 朗

おたずね

昨年十二月三十一日隅田局受付の郵便
振替で本誌購読料四千八百円の払込があ
りました。が、払込人の住所・氏名の記載
がありません。お心あたりの方は至急お
知らせ下さい。

川柳塔社 会計部

初歩教室

題——悠々——

本田恵二朗

自分の生んだ句を音読してみる楽しさを味
わつて欲しい。但し唯の棒読みでは味も芸も
ない。節らしきものがちよつぱりとあつてし
かるべきである。でもオーバーになると逆効
果となるであらう。楽しい句は明朗に、寂し
い句はしんみりなどの工夫をしなければな
らない。そこに音読の楽しさがある。十七音
字を五・七・五と三呼吸に読むべき句、八・
九或は九・八或は七・十と読むべき句などあ
る。

真心の彩(七 濃ゆからず(五 薄からず(五)
玉露にも(五 番茶にもなり(七 苦勞人(五)
足跡を残そ(九 砂のある限り(八)
真すぐに生きて(八 苦杯をなめ続け(九)

一粒の種(七 太陽は見逃さず(十)
これらの例句の呼吸を間違えると、リズム
カルに読めないばかりか句意を殺すことにな
る。ご自分の句を試唱してみたいと思つた。

悠々と渡れば青が赤になる

恵美子

(悠々過ぎるよと青信号に云われ)
悠々と退けどき見事百恵ちゃん
(悠々と花道見つけた百恵ちゃん)
ミルク飲み赤ちやん悠々高軒
(哺乳瓶飲み乾し悠々舟を漕ぎ)
悠々とわたる人生落し穴
(人生行路悠々歩けば落し穴)
名神を悠々と渡り行く
(悠々と名神国道亀が切る)
争いをよそに大河は悠々と
(美も醜も悠々呑んだ大河の貌)
貯金帖枕に悠々昼寝する
悠々と山は動かず雪を戴せ
(雪背負い山悠々と動かない)
悠々と雪に埋れて春を待つ
(悠々と雪衣着て春を待ち)
残る余生悠々迫らず趣味に生き
(余生悠々趣味の世界を漫步する)
三十の初春を悠々嫁きおくれ
正月の空悠々と奴風
(奴風悠々初春の空を舞う)
悠々と浮世を渡るポーズとり
悠々と黒幕裏で糸を引き
(黒幕の裏で悠々糸を引き)
悠々と歩いてるが遠い道
(道遠しだから悠々と歩くんだ)
悠々と見せて足裏落ちて着かず
(見せかけは悠々足の裏ではあせり)
悠々としてはおれない締切日
悠々としてはおれない齡となり

同 山 久
同 やすお
同 義 美
同 福 子
同 三 代
同 日 枝 子
同 健 司
同 峰 雪

(年輪がまたふえ悠々としておれず)
悠々と老いて句集に名をつらね
悠々と温泉一羽の羽根のばし
(悠々と五体預けたいでゆの香)
悠々と八十一へ風見鶏
(悠々と八十路楽しむ風見鶏)
悠々と歩巾軽やか靴が鳴る
(悠々と歩く八十路の青い空)
悠々と構えて心中覗かせず
悠々の暮しつれない風が消え
(悠々の暮し無情の風が消す)
悠々の老後夢見て夜勤耐え
へそくりをしこたま温め妻悠々
(へそくりを悠々温めている妻で)
悠々と泳いでるのに掬い上げ
悠々の家庭驚かす一騷動
(悠々の茶の間へ想わぬ隙間風)
被告でも悠々として元総理
(元総理悠々被告の顔でなし)
やるだけはやってのけたよ後悠々
(やるだけはやったよ悠々こせつかず)
冀度胸悠々と見え悠々ならず
(悠々と見せる美事なくそ度胸)
春の野に水悠々の貌となる
(谷川の悠々春の貌となる)
白雲は悠々春の風を抱く
(流れ雲悠々春の風に乗る)
悠々と音をはずして父の唄
(悠々ともし悠々と歌う父)
狭くても悠々自適な城がある
(狭くても悠々自適の城主です)

同 刀 水
同 房 子
同 な み
同 正 純
同 ふ み
同 登 舟
同 八 文 銭
同 武 水
同 佐 代 子
同

どたん場で悠々再起の思策練る

句味地

(どたん場で悠々再起の策を練る)
疑いの雲晴れ悠々潤歩する

同 公 乃

悠々と暁は猫と差向い
悠々とローン抱えて美酒に酔い

同 静 枝

(ローン重くかかえて悠々美酒に酔い)
悠々と地図をひらげた旅プラン

同 芳 枝

悠々と過す受験子親あせり
(受験子の悠々振りへ親あせり)

同 三 男

悠々と過疎を動かす酒一升
(過疎もまた佳し悠々と酒が友)

同 美 佐

しまい風呂音痴悠々張り上げる
大物の悠々雑事に目もくれず

同 千 子

定退の悠々自適に飽きそめる
(マイペース保ち悠々ゴルフ切る)

同 智 津 子

(マイペースくすくす悠々ゴルフイン)
新春の青空に鍾馗風ひとつ

同 胡 顔 子

(初春の空わがもの顔に鍾馗風)
親の脛悠々噛って成人式

同 勝 美

日溜りを野良猫悠々占領する
悠々と要所を衝いてゆく布石

同 柳 五 郎

(白石め悠々急所衝いてくる)
悠々と余生を下る夫婦舟

同 勝 美

(余生川悠々下る夫婦舟)
悠々と余生の流れへ棹さして

同 柳 五 郎

悠々自適まだまだ早い古稀の春
(古稀の初春悠々自適へ遠くいる)

同 柳 五 郎

ボス猿の泰然自若の面がまえ
(ボス猿の悠々せまらぬ面構え)

同 柳 五 郎

悠々と見える煙草の火が震え

同 柳 五 郎

悠々と流れたい雲せかす風

同 利 美

悠々自適年金暮しと見てくれず
忙中の閑を悠々糸を垂れ

同 貞 子

(悠々と忙中閑へ糸を垂れ)
風にそい煙悠々流れゆく

同 武 太

(煙悠々風の差図にさからわす)
悠々とヒリて卒業する自信

同 英 子

悠々自適人生ここに極る
(悠々自適余生の花園ここにあり)

同 寿 子

歳月に耐え悠々と風見鶏
悠々と飯面がずれる梯子酒

同 小 雅 子

(梯子酒悠々飯面を脱ぎ捨てる)
三ヶ日悠々という実家帰り

同 英 子

(さと帰りのとんのびりと三ヶ日)
子の財布だけは悠々小正月

同 慶 彦

秋独り悠々自適という酒仙
(悠々と仙人めいた独り酒)

同 保 夫

悠々と土に余生を温める
(さすが大物悠々として逮捕され)

同 慶 彦

悠々と大物逮捕悲れず
天下泰平土鳩に悠々住みつかれ

同 露 杖

悠々と来るなら来いの腕まくり
(受けて立つ構え悠々笑み浮べ)

同 帆 雀

悠々とトップの背にびたりつき
悠々自適老いの自信の歩が軽い

同 未 知

悠々と古書読む雪の三ヶ日
悠々と法の穴からめがね拭き

同 帆 雀

点と線悠々死角から覗き
悠々とサファリ野性無く太り

同 未 知

雪籠り悠々春を編む炬燵
年金では悠々自適もしておれず

同 瓢 太

(悠々自適せよとは年金のたまわす)
悠々と孤を描く鳶も生きるため

同

題—合図—3月20日締切(5月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一—九—三四
千七一 本 田 恵 二 朗

天理教修養科雑感

羽 原 静 歩

昨年九月、十月、十一月の三ヶ月間、修養科に入學させていただいたが、この間に私が得たものは「無限大の幸福は無限大の働きによって、ひとりてに天から与えられる」という真理でした。

以下、勉強させていただいた喜びを少し川柳に表現してみました。

拍手も明治大正昭和なり

ひのきしん則天去私の匂いする

神様に三連休はないと知り

冷々と大和の秋の祈りかな

人間のジョーク本心のぞかせる

拍手は漣か潮騒か

大 萬 川 柳

「蟹」

入選発表

選 者 川 村 好 郎
 入 選 四 十 四 句

大 阪 たけし
 猿蟹より孫の喜ぶドラエモン
 和歌山 悦子

蟹の旅横這いで到達す
 和歌山 としよ

美幌の宿毛蟹のうまさ忘れず
 東 子 悠 泉

せめてもの抵抗蟹が爪を立て
 奈 良 カズエ

ザリ蟹も孫大切な宝物
 寝屋川 晴 風

蟹不漁アブクが出そう留守家族
 和歌山 頼 次

まっすぐな心で蟹は横に這う
 今 治 三三島

怨念を赤く煮出した平家蟹
 岡 山 凡太郎

松葉蟹今夜も杜用族に会い
 倉 敷 春 日

啄木の涙を蟹に問うてみる
 島 根 早 苗

蟹料理値段の割りの量でない
 岡 山 七面山

蟹のよに酔った男の横歩き
 大 阪 満津子

上品に喰べて未練な蟹の殻
 大 阪 満津子

磯はなく白砂いずこ蟹いずこ
 大 阪 道 子

蟹の子も横這いをして歩き初め
 領海を私は知らぬトラバ蟹
 羽曳野 恵美子

友来り蟹酢ではずむコップ酒
 泡出して怒りか涙か逃げる蟹
 倉 敷 素身郎

蟹もよし地酒もいける雪の宿
 河川改修蟹の住処もふさがれる
 神 戸 どんたく

横這いを蟹にたとえて儲けてる
 そう言えは怨念の顔平家蟹
 米 子 雄 々

甲羅干す蟹ひとときの平和抱く
 料亭の膳で密談聞いた蟹
 住 句

恩讐を忘れ月夜の平家蟹
 和歌山 三 男

ニュータウンこころはざり蟹とつた川
 蟹を裂く其の一瞬が野獣めき
 羽曳野 幽 玄

蟹の味つられて出向く冬の旅
 米 子 美 世

蟹の味つられて出向く冬の旅
 岡 山 千代香

和歌山 和 子

倉 敷 三林坊

今 治 有 里

大 阪 善 紫

松 原 重 人

岸和田 千 舟

宝 塚 静 馬

和歌山 佐代子

大 阪 文 秋

堺 憲 祐

鳥 取 秋 女

羽曳野 幽 玄

堺 美乙女

米 子 越 子

大 阪 炬 斎

兵 庫 左 春

大 阪 文 秋

堺 憲 祐

鳥 取 秋 女

羽曳野 幽 玄

堺 美乙女

米 子 越 子

大 阪 炬 斎

兵 庫 左 春

大 阪 文 秋

堺 憲 祐

鳥 取 秋 女

羽曳野 幽 玄

堺 美乙女

米 子 越 子

大 阪 炬 斎

兵 庫 左 春

蟹走る所詮バケツの底なのに

人ノ句

守口 瓢太

蟹族から見れば人間の横歩き

選者吟

六 素身郎 三・〇

倉敷

昭和五十六年度第四回
「範囲」 三句以内

締切 三月二十日

酔ばらった蟹は真すぐ歩き出し

地ノ句

岡山 凡太郎

昭和五十六年度

ベストテン(二月現在)

一〇 柳伸 三・〇

大阪

第五回
「節約」 三句以内
締切 四月二十日

東海の小島で僕は蟹を食べ

天ノ句

大阪 君子

一 君子 五・五

大阪

一一 テルミ 三・〇

交野

〈投句先〉
〒593 堺市堀上緑町一―三十七
藤井二三方

二 凡太郎 五・〇

岡山

一二 幽玄 二・五

羽曳野

今治

三 どんたく 四・〇

神戸

一三 有里 二・五

尼崎

大萬川柳会

蟹工船北方領土はいつ還る

四 美幸 四・〇

八尾

一四 千子 二・五

三 重

大萬川柳会

任理事に送付する。

川柳塔社常任理事会(2月5日)

■長逝した戸田古方氏に哀悼の意を表し黙禱

■監事(会計監査役2名)若本多久志、川村好郎両氏正式に就任

■参事の職責について、地方同人推選の際、必ず当該地方の参事(1名でよい)の承認を必要とする。

■鳥取県参事として一名増員の件

■原稿取扱について、すべて本社編集部宛速達とする。もしくは、谷垣史好、橘高薫風両氏へ手渡しのこと。川柳塔、水煙抄、一路集の選者はとくに注意されたい。

■議事録コピーは若本多久志氏が行い、各常

任理事に送付する。句会運営について、句会部を再構成。句会運営について一切の処置を責任をもって行うこと。句会部長に西田柳宏子氏、副部長の任に児島与呂志氏を依頼する。

課 題

「仕事」 平賀紅寿選

「交代」 川村好郎選

◇選評の外に両選者の対談

■誌代値上げ(4月号より)の件。¥五百円とする。

出席―生々庵・瓢太・形水・薫風・史好・与呂志・吸江・潮花・紫香・水客・多久志・鬼遊・好郎・萬的・岳人・酔々。

(記録・酔々)

☆三月の常任理事会は五日(木)

左記へご投句下さい。

〒540 大阪市東区馬場町

NHK大阪放送局

入選発表は三月二十八日(土)ラジオ第一放送(全国放送)午前九時十五分より十時まで「老後をたのしく」の時間。

柳界展覧

(原稿締切毎月末)

会は3月1日(日)西大寺

市民会館にて開催

父 風来子、足音 千翁

役人 漢介、仏 新子、善

薫風、開く 奇童、壺

恵美子選

■岐阜川柳社主催川柳大会

3月29日岐阜商工会議所

開催

芽生え 鱈魚、艶 登美

子、効果 騎久夫、ワンマ

ン路也、自由席 史呂、

伸びる 紫苑荘、豊か いて

さむ選

■第4回鳥取県川柳大会

日時 3月29日(日)9時開

場 場所 山陰本線赤碓駅

下車赤碓町農業管理センタ

ー 題と選者・人類 河村

日満、推理 浜野奇童、愛

吉田か代、ヤング 小林

由多香、ひらめく 林瑞枝、

手さぐり 新おさむ

■今井胡次郎句集「縄ばし

ご」が出版された。序文・

岸本吟一他。200ページ

千八百円。

■直江武骨句集「歩み」が

発行された。序文・磯部鈴

波他、千五百円。発行所 小樽市奥沢3-26 22小樽

川柳社。

■日本川柳人名鑑完成発刊

顔写真、生年月日、職業、

所属吟社、代表句2句、A

4判250ページ。

■庄司登美子句集「彩硝子」

発刊記念川柳大会

日時 3月22日(日)11時

場所 愛知県産業貿易館西

館10F(市バス外堀町本町

下車) 兼題 髪・期待・

鎖・許可・紅白・帽子・ひ

とり・続く。

主催・名古屋番傘川柳社。

新参事・理事紹介

参事

松江市

恒松

町紅

米子市

石垣

花子

理事

松江市

舟木

与根一

▽同人・柳人消息△

■中川晃男氏(松江市・元

同人)療養中のところ去る

1月21日長逝。謹悼。

■堀江正朗・芳子夫妻(鳥

根県)近く、おしどり句集

刊行予定とのこと。誠によ

ろこばしいことである。

■戸田古方氏(川西市・本

社常任理事)かねて療養中

のところ、薬石効なく、遂

に2月1日長逝。誠に残念

なことである。氏は、川雑時代から、川柳塔に至るまで、常に、川柳会の第一線の人として活躍なされてきた。惜しい方とお別れするものである。享年76歳。

謹悼。なお、2月3日大阪江戸堀田照寺において告別式が行われた。主幹夫人小石さん、多久志・栗副理事

長をはじめ在阪同人二十有余名、他柳社の柳友各位参列、氏との訣れを惜しんだ。

▽句会案内△
■菜の花句会
時・3月10日(火)夕6時

場所・八尾神社境内西郷会館 近鉄大阪線八尾下車西

南歩約三分幸福相互銀行裏

兼題・楳々菜、うるさい、酔々、大阪風景、色、鳴る

連絡先―下581八尾市中田二丁目302高杉鬼遊

■南海川柳会
時・3月19日

場所・南海会館ビル本社地下食堂

兼題・恩、いやがらせ・時効。

連絡先―南海電鉄辻主水

■東大阪川柳同好会
時・3月28日(土)夕6時

場所・東大阪中央公民館 兼題・吉報、ひなまつり、ギヤラ、紙一重。

連絡先―下577東大阪市新池島町1の4の14斎藤三十四

■堺川柳会
時・3月16日(月)夕6時

場所・堺市民会館4F和室 兼題・のんびり、土、失礼、骨。

連絡先―堺市堀上緑町二丁目一二河内天笑

新 同 人 紹 介

山 本 桐 下

―小松園・鬼遊・規不風・推薦―

特別課題・おかげさま 山

後援 毎日新聞社

内静水謝選。

会費・千円 閉会16時予定

市では今回、「川柳ねや

◎投句拝辞。6題2句吐。

出句締切12時。出席者に

「山内静水家族七人句集」

謹呈。

主催 竹原川柳会

汐風川柳社叢書(限定版)

「月原宵明―その人と川柳」

序文 川柳塔主幹・中島生々庵

本書はB6版三百頁に及び、著者の作品・随想・伝記・年譜等を配してまとめたもの。人間月原宵明の生きざまの記録ですので、是非一読をお奨めする次第です。

頒価 一、五〇〇円

(送料・1冊三〇〇円、2冊三五〇円)

発行所 今治市共栄町二丁目二二三

叢書出版委員長 長野 文庫

汐風川柳社

兼題・鬼、鍵、劇、皿、枕

日時・9月6日(月) 10時

場所・竹原市大広苑

展▲

▼竹原川柳会創立25周年記念大会併せ川柳作品

展▲

日時・3月22日(日)午前10時

行

時・3月10日(火)夕6時

時・3月28日(土)夕6時

時・3月16日(月)夕6時

時・3月19日

時・3月22日(日)午前10時

時・3月28日(土)夕6時

時・3月16日(月)夕6時

時・3月19日

時・3月22日(日)午前10時

時・3月28日(土)夕6時

時・3月16日(月)夕6時

時・3月19日

時・3月22日(日)午前10時

本社 二月旬会

会場 金属会館

六日 午後六時

戸田古方氏逝去の悲しい報告で二月旬会が始まる。全員で黙禱。出席者七〇名、その中に奈良県生駒郡平群町から宮川古都路氏が、「川柳雑誌」時代以来実に五〇年ぶりの出席旧友を探してとのことだが、これを機会に引きつづきお顔を見せて頂きたいと思う。

柳話は野村太茂津氏。紀州・有田川の右岸に昨年暮、コクハクチヨウが一昨年と全く同じ日に渡ってきた。ユリカモメの群れにまじって、たった一羽のその鳥を見ながら考えた。恐らくシベリアからの長い旅の途中に仲間から外れて、やっと辿りついたのであろう。人間なら言葉がある。言葉を使って自分の思いを表現することが出来るが、この渡り鳥は今、自分の体で何を表現しようとしているのか。白鳥の心になり代れたら、どう表現するだろうか。川や海、山を詠んだ句は数多くあるが、言葉の奥にある感情、心象を深く読みとるべ

きである、と渡り鳥に託して氏の川柳観を展開された。

月間賞は山添眉水氏が獲得。

なお閉会後、旬会部で今後の運営につき打合せを行った。

(史)

(受付・与呂志・敏・重人)

(進行・柳宏子、記録・敏)

出席者 川敏・重人・与呂志・滋雀・あいき・

潮花・雅風・勝美・喜一郎・静歩・古都路・

千代三・右近・太茂津・としよ・水客・紫香

・憲祐・萬的・吐来・道夫・夕花・規不風・

桐下・射月芳・頂留子・綾珠・千万里・眉水

・生々庵・天笑・瓢太・英子・川狂子・形水

・文秋・君子・山久・鶴汀・悦郎・幸太郎・

洋敏・善紫・信治・吸江・度・栞・柳宏子・

健司・翠光・英壬子・雀踊子・柳伸・武太・

糸葉・智子・岳人・鎮彦・酔々・涼一・弥生

・鬼遊・小松園・史好・好郎・凡九郎・寿子

・薫風・亜成・葉子。

席題「空」

那須鎮彦選

大空へ罪洗われてゆく心

寿子

ベッドから四角な空を見て暮らし

鬼遊

大空へ二十の夢がはばたくよ

翠光

雪ふらしすぎて恨みを買った空

鬼遊

大空に高層ビルが突きささる

健司

傷心の私へ空がきれいすぎ

大空の画布には赤が美しい

こがね色の空へ朝の深呼吸吸

触れ太鼓澄んだ隅田の空に飛び

正月の空に富士山よく似合う

果立つ子は空の広さを不安がり

すばらしい夕陽に空も顔を染め

くもの巣に空の広さが透きとおる

鳩笛を吹くと故郷の空が見え

悟りきる菩提樹の空美しい

再出発空もだんだん晴れてくる

山男空の機嫌を見て登る

夢を描く空あくまでも蒼くなる

はい上る暮らしを空にのぞかれる

恋人がほしくなるよな青い空

どの星ももつてる空は青いだろ

空馳ける気概を持ってと叱咤され

友だちをだますと暗い空になる

瞑想の詩人は空を見て飽きぬ

逆さ富士空も小さく揺れている

煙突を軸に星空傘になり

少年が空を飛びこす水たまり

少年の空を信じる竹トンボ

病む人の心ゆさぶる青い空

澄み切った空へ貧しさなど忘れ

生きてゆくドラマに広い空がある

としよ

規不風

眉水

英壬子

英子

射月芳

あいき

滋雀

桐下

静歩

としよ

憲祐

智子

柳伸

夕花

規不風

右近

千代三

千代三

水客

あいき

鬼遊

桐下

千万里

信治

好郎

空をかく園児に今日は雲がない
一匹の蟻でしかない空の下
煩惱は捨てようあんなに青い空
青空の下で古城がシャーンとする

席題「パン」

榎本吐来選

カニ型のパンの足から食いかなり
その昔パン一切れで身を落し
パン屑も捨てない主婦へ鳩の群れ
三ヶ日そろそろパンが欲しくなり
一枚のパンが焼けた靴の紐
国策に添ってパン食やめておく
パン嫌い僕は頑固な日本人
ライバルもフランスパンを抱えてる
モーニングサービスのパンで

すませる独り者
パンちぎるすこしうれいの見える指
パンの耳あきたか庭の池静か
パン屑へ仲間はずれのやせた鳩
パン食も効能みせぬ肥満体
ひとりパン焼くのをを見る熱帯魚
正月もパン食にする子に育ち
パンの耳かじった過去あるチャンピオン
黒パンよ儚い青春ありました
イーストのふくらみ育てる夢に似て
サービスの卵とパンで昼つなぐ

吸江 天笑 千万子 雀踊子 あいき 吸江 敏 としよ 重人 千万子 千代三

千万子 智子 重人 鎮彦

鎮彦 鴨汀 雅風 夕花 雀踊子 文秋 太茂津 酔々

吸江 天笑 千万子 雀踊子 あいき 吸江 敏 としよ 重人 千万子 千代三

吸江 天笑 千万子 雀踊子 あいき 吸江 敏 としよ 重人 千万子 千代三

パンのためだけにない仕事して見たし
トーストのいつか明治の歯に馴染み
宝塚のスターでパンが嫌いです
パンに飢えこころに飢えた敗戦記
雑兵はパンのかたさを知っている
パンうどん代用食という記憶
パンの耳好きな娘が売れ残り
パン食の後も番茶のいる明治
ハンドルの今日はパン食して急ぎ
ミルクにパン漬けて良心ねじ曲げる
今日のパン欲しさに男耐えている
一片のパンに急かれて朝を発つ
難民の子等は知らないパンの耳
街にパン溢れてこころ飢える日よ
一人暮しの朝のしじまにパン跳ねる
パンの耳わかれ話を聞いている
わだかまり解けぬまま焼く朝のパン
計の電話パンはちぎったままにある
トーストが焼けて七人の敵が見え
パンと飯互いに譲らぬ夫婦仲

兼題「伏線」

宮尾 あいき選

伏線と取れる言葉へ身がまえる
伏線を果す家族がいてくれる
さりげない伏線背な身構える
別れようと思う伏線引いておく

瓢太 信治 紫香 夕花 規不風 射月芳 与呂志 としよ 悦郎 水客 射月芳 右近 英子 君子 吸江 岳人 水客 静歩 吐来 信治 柳伸 寿子 君子

伏線を敷いて病名告げられる
さりげなく伏線をはる言葉尻
追伸へチャリ伏線匂わせる
伏線となるバレンタインのチョコレート
伏線から相手の肚が読めて来る
企みのある伏線にトゲがある
伏線を敷いて商魂抜け目なし
さり気なく伏線らしく敷いてある
土壇場へきて伏線が生きてくる
金を借る伏線のくどすぎる
伏線はワナだと誰も気づかない
何となくほのめかしていた娘の家出
時刻表の枠伏線となるドラマ
頼まれもせぬに伏線張りたがり
巧妙な伏線裏あり表あり
視聴者の心理を読んでいる伏線
伏線のお見事女流評論家
伏線に相手の腹がもうわかり
伏線を辿るとききれいな罫が待ち
終りまで読まず伏線キャッチする
仲人の伏線嬉しく拝受する
伏線に父の名前を借りておく
伏線の手はずが利いた票が延び
伏線に真意手応え待っている
背水の陣に伏線など要らぬ
花言葉恋の伏線敷いて置く

英子 形水 静歩 静歩 善紫 涼一 文秋 太茂津 水客 吸江 夕花 君子 英子 柳伸 度 雀踊子 としよ 文秋 滋雀 英子 規不風 智子 憲祐 弥生 滋雀 潮花

伏線を張って結論急がない
追伸でじんわり伏線敷いておき
見当をつけて伏線張っておく
伏線にすこし裏切りまぜておく
伏線は網の目権力はしいまま
伏線を見破る妻の瞳眩しすぎ
伏線の時計の針のさり気なく
伏線に別れ話が秘めてある
伏線に殺し文句が敷いてある
政治家の伏線を聞く首に風
伏線も張らずに自称雄弁家

兼題「ラッシュ」 高杉鬼遊選

駅に着きやつと二人は手をつなぎ
オフィス街のラッシュカレーの匂する
ラッシュにも負けてはおれぬ定期券
口紅の高さに肩があるラッシュ
上げた足おろすところがないラッシュ
振る旗もなくラッシュの列にいる
おははんも海外旅行を話してる
よう混んでまんアとスリも如才なし
にんにくの臭いに耐えているラッシュ
朝帰り出勤ラッシュに巻き込まれ
ラッシュアワーを少しずらせる蝸牛
ラッシュとは何んのことかなかつわり
カーラッシュ自転車スーと通り抜け

水客 吸江 射月芳 夕花 英子 吐来 夕花 滋雀 信治 あいき 哲寿 凉一 糸葉 英壬子 紫香 憲祐 武太 静馬 吐来 あいき 智子 醉々 凡九郎

年金を値上げラッシュが吹き飛ばし
ラッシュよくここまで来たと停年日
負けいくさ言葉のラッシュ浴びている
ラッシュアワー掏摸と痴漢が向い合い
吊皮も生きる重さを知るラッシュ
三千院のラッシュも春を待ちわびる
ライバルも彼女もラッシュの中にいる
ラッシュ時は避けて職安通いなり
着ぶくれて押されて眠くなるラッシュ
遮断機のがらがぬ朝を犬もさげ
ラッシュ楽し女の肌が匂うてる
今年また値上げラッシュで寒い春
ラッシュもう女の体面など持てず
吊皮が一つたよりというラッシュ
ふる里へ帰るラッシュは苦にならず
定紋の風呂敷ラッシュアワーに乗り合せ
冷え込んだ朝のラッシュのナフタリン
ラッシュアワーブーツでやんわり踏みかえし
ラッシュ時キャベツの値上がり考える
積み残しされていらいるラッシュ
棚の荷のだんだん遠くなるラッシュ
共稼ぎ他人の顔でいるラッシュ
ラッシュアワー四〇キロは宙に浮き
吊電を打つこと考えているラッシュ
ラッシュより知らぬ男の定期券

好郎 雅風 水客 潮花 文秋 凉一 重人 洋敏 柳伸 度 生々庵 右近 千万子 千万子 洋敏 英壬子 英子 岳人 眉水 度 滋雀 多久志 岳人 鬼遊

兼題「悪夢」

黒川紫香選

見た時間聞いて悪夢へ身構える
悪い夢見た事にして過去捨てる
悪夢から覚めると頭はけている
天国に遊ぶ思いでいた悪夢
うぬばれ強く悪夢とは気が付かず
悪夢だと思えば安い手切金
悪夢から覚めて故郷の土を踏む
悪夢から自重している二三日
人質の悪夢は誰も喋らない
回転ベッドでこわい夢ばかりみる
悪夢からさめて七人の敵がいる
それとなく母へ長距離する悪夢
悪夢からさめて首筋なでてみる
悪夢から逃げて飛び石踏みはずし
悪夢から醒めると小便したくなる
絨緞が赤くて悪夢見る男
宝くじ当った悪い夢である
さか夢と思えど悪夢気にかかり
黙舌つづく裁きの中で見る悪夢
悪夢からさめると喜劇の幕になる
戦争に敗けると悪い夢にされ
二月三日鬼一族はみな悪夢
汗かいて悪夢から覚め風邪を引き
悪い夢見たらハンドル握らない

弘生 女 悦郎 文秋 善紫 滋雀 桐下 智子 英子 天笑 山久 生々庵 勝美 太茂津 岳人 史好 鬼遊 好郎 千万子 滋雀 史好 凉一 綾珠 潮花

悪夢からさめるとトースト待つている
友一人去る身辺にある悪夢
スターの座それから自由のない悪夢
悪夢みるひまもない程よく眠り
悪夢より怖い事実の朝が明け
悪い夢見たことにする昼の月
悪夢見た女の日記捨ててある
ゆんべの夢が悪かったですむ話
悪夢のような一夜が導火線になる
悪い夢みたと電話をくれる母
逆夢もあると諦らめ朝が出る
悪夢もつ忘れて白い日記買つ
裏判を押して悪夢を見続ける
洞窟の中で悪夢に悩まされ

兼題「三りんぼう」

菊沢小松園選

三りんぼう姑の前では逆らわず
大工さんがデートしている三りんぼう
対向車三りんぼうを乗せて来る
母の言う三りんぼうは信じよう
三りんぼうやさかいと棟梁飲んでる
眼鏡越し三りんぼうは生きていた
三りんぼう血筋かも知れぬ受話機おく
三りんぼう俺の辞書には書いてない
三りんぼう気にしいしい羽田たち
三りんぼうその日嬉しい事もあり

静歩 千万子 萬的 あいき 君子 智子 千万子 水客 翠光 多久志 好郎 英子 紫香 静馬 弘生 静歩 重人 静歩 水客 健司 生々庵 鶴汀

白旗を素直に振ってる三りんぼう
逢いたくて三りんぼうへ朱を入れる
交通違反三りんぼうのせいにする
職人が外科へ走った三りんぼう
三りんぼうおんな鼻緒をきつく締め
兎小屋でも三りんぼうはさけて建て
建売りは三りんぼうでも建てて
三りんぼうなどは知らずに子が生まれ
三りんぼう夫婦喧嘩は明日にする
三りんぼう掏摸の眼からも見放され
三りんぼうまでも気になる下り坂
三りんぼうだったと別れてからわかり
三りんぼう大工朝から釘を挽き
初デート三りんぼうを気にしない
三りんぼう避けて通れぬ青写真
仏滅も三隣亡もない若さ
可も不可もなく夕焼けた三りんぼう
三りんぼう避けて女は雨に濡れ
三りんぼう古い女にある唇
三りんぼう街の鳥は知っている
帰宅して三りんぼうを確める
三りんぼうだんだん無口になってくる
三りんぼう飯場に地下足袋干してある
三りんぼうダルマは倒れたまま起きず
靴かわる位ですんだ三りんぼう

弥生 寿子 好郎 信治 岳人 善紫 英子 鬼遊 規不風 水客 憲祐 好郎 信治 あいき 滋雀 文秋 桐下 与呂志 雀踊子 岳人 与呂志 天笑 右近 眉水 小松園

■「各地柳壇」追加

南大阪川柳会

中川 滋雀報

カットしてどうやら原稿らしくなり
古都に雪待たねばならぬワシカット
恒例に甘い官吏の温い椅子
事始めきれいだころの重ね餅
値上げにもストにも慣れて暮近し
姿見も容姿端麗とは言わず
金貨せば友は姿を見せに来ぬ
後妻方に似ていて追って見る
子は親の後姿を見て育ち
若者の姿に未来図画いてみる
実る日のあると信じて種を蒔く
栗の木は実らぬ内に虫を抱き
この恋は実ると見てる花時計
それぞれの意見で旅行まとまらず
それぞれの想いからんで会議もめ
除夜の鐘聞いても減らぬ罪の数
ライバルが場数を踏んだ顔でくる
最終は零人生の数字です
石段の数が喘ぎになる祈り
実を結ぶまでの長さよ道のりよ

久子 酔々 楓楽 勝美 洋子 文秋 善紫 綾珠 節子 智慧子 好一 儀一 千代三 あいき 頂留子 憲祐 度 凡九郎 滋雀 君子



■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。
十七字以内の句に、下三マスに雅号。

京都塔の会

松川 杜的報

石仏をより穂やかに昼の月
笑つても澄まして見ても年のまま
すき間から粉雪コロコロ遊びに来
四五冊の本を抱きしめ汽車にのる
釣り糸が光って秋の水が落ち
横綱のポスター露天風呂の隅
土へ帰る紅葉シャボンソウたいつ
泣き寝入りの涙に月の色うつる
忙しい貴方に合やす昼のお茶
水の冬ぞうりの鼻緒痛かりし
水溜り里は昔のまの径
Uターンせよと故郷の雲の色
里の子の歌が峠を越えてくる
風花が舞うて民話の里になる

わかあゆ川柳会

小砂 白汀報

世話好きでやたらに花の苗を分け
空き缶になつて明日を考へる
前向きに立ち向う日給をつめ
気が変わり結婚指輪が重くなる
大汗を流し世話好き嫌われる

求芽 芳香 紫李 白花 潮友 和美 遊香 飛香 俊三 白溪子 杜的 花代子 水客 白汀報 恒星 美栄 はるみ 白汀 夢

菜の花句会

高杉

鬼遊報

世話好きが見合写真を持ち歩き
世話好きがまた持ち込んだ後始末
旅の恥かき捨て空き缶草に寝る
空き缶を感謝の気持で捨てに行く
世話好きがいぬ事にも口を出し
町内に世話好き四五人いる強み
世話好きへ話も聞かず断わられ
駈落の大坂城に迎えられ
裏門を叩き戎さん念を押し
極楽に登るに糸が細すぎる
デノミまで千円札は二軍落ち
天守閣もつ大阪にいくなし
ボチ袋千円入れて考へる
天井に羅漢の顔が二つ三つ
ダイヤルが廻るとトリックも廻る
スタイルについてゆけない登山靴
千円を持つ西成の昼の酒
天井のカメラがとらえた目出し帽
人ひとり許す気になる登り坂
天井うらねずみ小僧はやがて来る
見合写真はもの見事なトリックだ
天井に届くケーキを三度切る
ネクタイを遺品に冬の山登る
千円を借りる友なら多くいる
麻酔薬消えたと天井見えて来る
弱虫で人のあとから坂登る
トリックと知ってかかるとお正月
川柳わかやま

歳栄 輝水 清泉 タケノ 敏明 清夢 鈴江 小松園 柳宏子 射月芳 柳度 凡九郎 勝美 鎮彦 柳伸 雀踊子 紀美代 弥生 岳人 鬼遊 昭子 糸葉 悦郎 夕花 三男報 正博 芳朗

削ぎ落としそぎ落とされて古稀光る
埋もれ火を起した憎い君は古稀
自画像の仕上げに励む古稀の日々
古稀三人揃えぬ今日へ枯葉散る
何もかも赦して古稀の目は静か
我が道を行く負け犬と言われても
方便に負け犬となる銭勘定
負け犬でよいと悟って口つくむ
尾を振つてみたが犬にはなりきれず
結び目をといてからめて編む人生
人生の余白を飾る色探す
人生の今日から先のむずかしさ
人生の幕は錦の緞張で
お手本のない人生を切り展く
善を積む夫婦に茜空がある
街角で手を振るまでは泣くまいぞ
街角も師走の速さで動いてる
街角があるから別れて行く二人
川柳たけらは 森井 静水 青居報 佐代子 和子 光代 公子 英子 勇太 すみ子 緑楼 秀雄 千尋子 天彦 武雄 克み

きみ 克雄 武雄 茂津 天彦 千尋子 秀雄 緑楼 すみ子 勇太 公子 英子 光代 和子 佐代子 静水 愛紀 房子 政己 こうじ 鈍舟 寛子 靖子 菁居 笑子 蘭幸

陽うららさらばさらばと舞う落葉
 酔いさめて妻の言葉をまるく聞く
 吹けよ風男に燃えるものがある
 孫が来てうらめしうに猫が去る
 一人旅街の素顔を見て帰る
 定年の落ち目に坐る椅子がない
 ご自慢のカメラにはボケている
 素朴さがホロホロさせて旅の路
 指切りげんまん秋のロマンはすっぱいね
 東大阪川柳同好会 斉藤三十四報

不 朽 鬼 焼 節 夫 秀 路 一 香 敬 子 かつこ
 喜一郎 喜風 滋啓 かずを 良教 慶三

お相撲さんに定食などはない
 年を越す喜び自筆の年賀状
 読めぬせぬ誰それ様の御自筆
 お仕立物します自筆が風に舞う
 日記帖自筆で嘘しめ旅をする
 定食で幹事まかせの旅をする
 太鼓帯結ぶと女弱くなる
 帯締めて女将いくさの顔になる
 前向きの男は雨を苦にしない
 いわた帯しめると強くなる女
 帯叩く女将へ幹事飲み直す
 兵児帯に唄い継がれたわらべ歌
 横顔へ他人の視線つきささる
 川柳高知 川竹 松風報

三十四 弥山人 頂留子 美九郎 凡九郎 光水 度 湖風 鎮彦 綾珠 弘生 千秋 千代子 康子 菊野

屋台からブーツがのぞく十二月
 わが町に沈む夕日を自慢する
 ある記憶いま改札を抜ける人
 十二月三十一日啞になる
 灰皿を味方に置いて下戸が酌ぐ
 献立を隣りの籠におしえられ
 シヤボン玉丸さをのせる程の風
 年ごとに思い出ばかり強くなり
 転落の女がいだく罪と罰
 相続へ計算づくの顔揃う
 計算でない友情の温かさ
 川柳塔まつえ 恒松

三吉 秀子 紅雨 広風 甲子 登舟 富久子 朱坊 麗風 松風 町紅報 新雪 耕草 伊都 雪苗 早苗 鉄花人 巡歩 寿美子 鶴丸 登美也 孤呂二 与根一 舞吉 愚童 叮紅 弘生報 道子 忠夫 公一

一分間の柳論

川柳を始めて数年の僕に、ダンボール箱一杯の川柳雑誌がたまった。それに比べて本棚に並ぶ句集の貧しさ。

毎月届く雑誌類は、拾い読みする程度（それも句よりも文章を）である。雑誌を端から端まで読むほど川柳というものに惚れきつていないし、当然のことだが良い句が少ないからである。

好作家の句を数多く読みたい僕にとって、川柳界が一年間に生む句集の数は決して多い

桑原道夫

とは言えない。特に中堅作家の句集が少なすぎると思う。いま精力的に句を書いておられる好作家の句集が少ないのは、実にさびしいことだ。そこに、僕は川柳界の貧しさを見てしまっているのである。

伝統のある大川柳結社に望むこと。物故川柳人のすばらしい句集を復刊してほしい。豆秋や鮎美を手軽に読めない僕は、幻の伝統しか見ることができないのである。

宝船長も唄に待たされる
 掌中の宝を狙う男たち
 漁の宝庫目の前にして境界線
 わが宝家族揃った雑煮餅
 伸びのびと欠伸女の仕舞風呂
 防衛費無意味に伸びる国となり
 伸びる日本アスワン諸国の風当り
 背伸びした暮しに足もと揺れている
 上品に口説くと冗談にされる
 雪女ふつと地蔵に口説かれる
 口説かれてからの髪型変わるなり
 仲人の口説きの裏に本音出る
 胃カメラに異常なかった上機嫌
 靴音でわかる親父の上機嫌
 上機嫌へ増税という平手打ち
 城北川柳会 川口 弘生報

領海をわたしは知らぬトラバガニ
 どの宿も沢蟹の出る飛驒の旅
 蟹工船多喜一の頃が嘘のよう

真直ぐに歩けば方角狂う蟹

遅かつた出会い慕情は永遠に秘め

貴方様お慕ひしますと夢二調

雪国の友故郷のカニを提げ

慕い寄る猫を追ひやり寝正月

かしづいて母のさとしを慕う日々

悲しみを語りかけそな平家蟹

師を友と慕いて毎年クラス会

兄ちゃんと慕われた声だれ耳に

冬休み母を慕いて故郷へ

慕う子を振り切り勤めに出る寡婦

慕うてた彼氏も独り知った夏

懸命に目立たぬ花が慕う蝶

慕われて教師僻地に落着く気

兄さんと慕った人とゴールデン

まっすぐに歩いて蟹に笑われる

川柳化粧檣

植村客遊子報

縁談を集金先でたのまれる

レンジではチンと味気無い酒の燭

泣き言も苦情も集金さかされる

狂う程踊って阿呆になり切れず

十円で話せる距離で夜が更ける

ポケットのそんなマッチで足がつき

まだ妥協しないが妻の薄化粧

名城も模型の素材マッチ棒

胸にだけ秘めた恋でも老いたのし

過去去らざり子のため明日へ継ぐ命

あの人のくせと知りつつ腹を立て

峠越す車チェーンが積んでなし

川柳ささやま

河原みのる報

峠越す手綱は妻が握りしめ

百合子

としよ

満津子

ふみ

星斗

捷一

テルミ

左春

午郎

茂樹

秀村

千子

弘

美恵

右近

三十四

炬齊

紅月

秋月

岳詩

葉香

奮水

実男

越山

永楽

大鷹

秋鷹

拍秋

客遊子

客遊子

客遊子

国境を越えて聖火は燃え続き

塩壺を覗いた過去が越しきれぬ

嬬糸女の道を母は巻き

道変えて再起をはかる彩を撰り

老農の歩いた道をいま迷い

母さんの涙で知った道しるべ

修正のシャシン私と違ふ顔

修正に襖の破れ念が入り

怖いほど耳の修正良く聞こえ

修正の出来ぬ言葉が出てしまひ

山門の焚火へ独り手をかざし

建築を見上げ焚火に足を留め

今日のブラン朝の焚火に温める

良い焚火尻目に走る御出勤

川柳わかやま

堀端

はぐれ鳥俺一人ではないらしい

逆境で開いた花の底力

男らしい男は酒の威を借りず

得意満面一杯開いた鼻の孔

開運の鍵を見付けた玉の汗

伴せの扉開いた汗の鍵

よろこびが口を開けば消えそつて

主人の個性で開くドアになる

逆境へ開き直りの青い空

盃の底へ決意を置き忘れ

左遷には触れず落日の友と酔い

ほろよいであんなきれいな嘘をつき

関つげる軍鶏は男の貌となる

大空へ羽ばたく鳥は振り向かぬ

刑務所の庭に白鷺一羽立つ

幸

エキオ

文平

越山

ゆう也

可住

和子

テル

房子

靖子

つや子

ひか平

枝葉

宗珠

一孟

凡九郎

茂子

佐代子

柳宏子

武雄

正博

和子

善太

秀雄

寿子

寿子

幸代

としよ

誠太

英子

幸

コップ酒の底へ沈める不発弾

ものを言う鳥にたかぶりのなされる

生きた銭父の財布の開く時

龍の鳥自由に飛べる日を狙い

川柳たけはら

森井

妻の字の重さはほほ笑みたやすまじ

神だけが知ってる明日を信じたし

花の絵を描いて心を暖める

正月の実感お年玉もらう

新年号買って心のネジを巻く

北へ向く男にきびしい向い風

哀しきは運命のままに生かされる

はぐるまのどこかくるるて松が枯れ

炎をみつめ炎を追う女もネギを買い

春風を信じ銀杏も地に還り

小春日の空へたかたか一才よ

美辞麗句きくコーヒーのほろ苦さ

カレンダーめくると逃げない青い鳥

サカカス我が少年の日の記憶

空想の中で夫婦のこま回る

子に賭けて巣立つたあとの妥協ぐせ

湯豆腐の貧しさがいい冬の手品師

髪染めてみても体がついて来ず

雨あめに春遅すぎた少女病む

元旦やあと幾日の宮仕え

青春をふとかみしめるバースデー

南海電鉄川柳部

辻

生きていける限り納期は迫り来る

宏子

裕美

緑楼

十郎

悦子

静水

貞子

一路

紀

房子

こうじ

文晴

政己

不朽

節夫

寛子

節舟

鈍居

青居

蘭幸

鬼焼

秀水

かつこ

かつこ

里香

英詩

愛

主水報

小松園

勝美

千万子

下請けの納期までにとベタルふむ
是非納期までにと尻を叩かれる
まだまだと思つて内納期来る
急いでる納期渋滞車に出会い
割引のあるうちにと納めてる
納期日を知らず封書に顔くもる
丁寧に仕事を間も書けない納期
ローンの納期終り大の字でかくいびき

口下手の悔み頭を下げるだけ
口下手は好きというのに骨がおれ
口下手が何時も人から誤解され
口下手を好いて来る客きらう客
才能はあれど口下手玉にきず
損得がからめば口下手しやべり出し
口下手を真似て皆んなを笑わせる
手抜きした子にはあらねどこのお面

堺川柳会

河内

天笑報

邦晴

千万子

夢遊

佐久良

一二三

千代三

東雲

素灯

柳安子

美乙女

ミツエ

凡九郎

与呂志

健司

鍛練の不足あらわに山にパテ

大声が飛び重なつて年の暮

適齡期世間が遊ぶ氣にせす

湯気の香が招く茶の間で冬語る

不覚なり入歯はすして出迎える

わき役は花道なんか飾らない

十二月小さな義理も片付ける

ちと具合悪い他人の顔でいこ

血と汗と涙でとった名人位

海鳴りが聞える名人芸の三味

名人の乗りたる馬は又一位

名人の佯しと挑む嶺がない

名人がおどれば舞台狭くなる

川柳大阪

西岡

洛醉報

德松

比呂志

秀峰

ひろ子

真佐志

喜醉

三十四

醉花

二天坊

德松

みつる

本蔭棒

敏

鍛練の不足あらわに山にパテ

大声が飛び重なつて年の暮

適齡期世間が遊ぶ氣にせす

湯気の香が招く茶の間で冬語る

不覚なり入歯はすして出迎える

わき役は花道なんか飾らない

十二月小さな義理も片付ける

ちと具合悪い他人の顔でいこ

血と汗と涙でとった名人位

海鳴りが聞える名人芸の三味

名人の乗りたる馬は又一位

名人の佯しと挑む嶺がない

名人がおどれば舞台狭くなる

川柳大阪

西岡

洛醉報

德松

比呂志

秀峰

ひろ子

真佐志

喜醉

三十四

醉花

二天坊

德松

みつる

本蔭棒

敏

鍛練の不足あらわに山にパテ

大声が飛び重なつて年の暮

適齡期世間が遊ぶ氣にせす

湯気の香が招く茶の間で冬語る

不覚なり入歯はすして出迎える

わき役は花道なんか飾らない

十二月小さな義理も片付ける

ちと具合悪い他人の顔でいこ

血と汗と涙でとった名人位

海鳴りが聞える名人芸の三味

名人の乗りたる馬は又一位

名人の佯しと挑む嶺がない

名人がおどれば舞台狭くなる

川柳大阪

西岡

洛醉報

德松

比呂志

秀峰

ひろ子

真佐志

喜醉

三十四

醉花

二天坊

德松

みつる

本蔭棒

敏

鍛練の不足あらわに山にパテ

大声が飛び重なつて年の暮

適齡期世間が遊ぶ氣にせす

湯気の香が招く茶の間で冬語る

不覚なり入歯はすして出迎える

わき役は花道なんか飾らない

十二月小さな義理も片付ける

ちと具合悪い他人の顔でいこ

血と汗と涙でとった名人位

海鳴りが聞える名人芸の三味

名人の乗りたる馬は又一位

名人の佯しと挑む嶺がない

名人がおどれば舞台狭くなる

川柳大阪

西岡

洛醉報

德松

比呂志

秀峰

ひろ子

真佐志

喜醉

三十四

醉花

二天坊

德松

みつる

本蔭棒

敏

鍛練の不足あらわに山にパテ

大声が飛び重なつて年の暮

適齡期世間が遊ぶ氣にせす

湯気の香が招く茶の間で冬語る

不覚なり入歯はすして出迎える

わき役は花道なんか飾らない

十二月小さな義理も片付ける

ちと具合悪い他人の顔でいこ

血と汗と涙でとった名人位

海鳴りが聞える名人芸の三味

名人の乗りたる馬は又一位

名人の佯しと挑む嶺がない

名人がおどれば舞台狭くなる

川柳大阪

西岡

洛醉報

德松

比呂志

秀峰

ひろ子

真佐志

喜醉

三十四

醉花

二天坊

德松

みつる

本蔭棒

敏

鍛練の不足あらわに山にパテ

大声が飛び重なつて年の暮

適齡期世間が遊ぶ氣にせす

湯気の香が招く茶の間で冬語る

不覚なり入歯はすして出迎える

わき役は花道なんか飾らない

十二月小さな義理も片付ける

ちと具合悪い他人の顔でいこ

血と汗と涙でとった名人位

海鳴りが聞える名人芸の三味

名人の乗りたる馬は又一位

名人の佯しと挑む嶺がない

名人がおどれば舞台狭くなる

川柳大阪

西岡

洛醉報

德松

比呂志

秀峰

ひろ子

真佐志

喜醉

三十四

醉花

二天坊

德松

みつる

本蔭棒

敏

鍛練の不足あらわに山にパテ

大声が飛び重なつて年の暮

適齡期世間が遊ぶ氣にせす

湯気の香が招く茶の間で冬語る

不覚なり入歯はすして出迎える

わき役は花道なんか飾らない

十二月小さな義理も片付ける

ちと具合悪い他人の顔でいこ

血と汗と涙でとった名人位

海鳴りが聞える名人芸の三味

名人の乗りたる馬は又一位

名人の佯しと挑む嶺がない

名人がおどれば舞台狭くなる

川柳大阪

西岡

洛醉報

德松

比呂志

秀峰

ひろ子

真佐志

喜醉

三十四

醉花

二天坊

德松

みつる

本蔭棒

敏

鍛練の不足あらわに山にパテ

大声が飛び重なつて年の暮

適齡期世間が遊ぶ氣にせす

湯気の香が招く茶の間で冬語る

不覚なり入歯はすして出迎える

わき役は花道なんか飾らない

十二月小さな義理も片付ける

ちと具合悪い他人の顔でいこ

血と汗と涙でとった名人位

海鳴りが聞える名人芸の三味

名人の乗りたる馬は又一位

名人の佯しと挑む嶺がない

名人がおどれば舞台狭くなる

川柳大阪

西岡

洛醉報

德松

比呂志

秀峰

ひろ子

真佐志

喜醉

三十四

醉花

二天坊

德松

みつる

本蔭棒

敏

鍛練の不足あらわに山にパテ

大声が飛び重なつて年の暮

適齡期世間が遊ぶ氣にせす

湯気の香が招く茶の間で冬語る

不覚なり入歯はすして出迎える

わき役は花道なんか飾らない

十二月小さな義理も片付ける

ちと具合悪い他人の顔でいこ

血と汗と涙でとった名人位

海鳴りが聞える名人芸の三味

名人の乗りたる馬は又一位

名人の佯しと挑む嶺がない

名人がおどれば舞台狭くなる

川柳大阪

西岡

洛醉報

德松

比呂志

秀峰

ひろ子

真佐志

喜醉

三十四

醉花

二天坊

德松

みつる

本蔭棒

敏

鍛練の不足あらわに山にパテ

大声が飛び重なつて年の暮

適齡期世間が遊ぶ氣にせす

湯気の香が招く茶の間で冬語る

不覚なり入歯はすして出迎える

わき役は花道なんか飾らない

十二月小さな義理も片付ける

ちと具合悪い他人の顔でいこ

血と汗と涙でとった名人位

海鳴りが聞える名人芸の三味

名人の乗りたる馬は又一位

名人の佯しと挑む嶺がない

名人がおどれば舞台狭くなる

川柳大阪

西岡

洛醉報

德松

比呂志

秀峰

ひろ子

真佐志

喜醉

三十四

筆談が手帳に弾む身障者
切る尻尾いくらでもある大政党
振り返りや札を言いたい人はかり
手帳からうっかり落ちた花名刺
尻尾振る大で十年長く生き

ちらりちらり尻尾覗かす猿芝居
ゴーゴーを踊る天井からの星
茜雲ふり返る絵を書いている

川柳ねやがわ

高田

博泉報

社会がどう変わろうと炭を焼く
ポークスも無い身に何の年の市
たまさかの帰郷知らせるクラクション
いちじくの青きに少年つつ走る
難しい男が折れて出る不気味
戦争を知らぬ社会で反戦歌
人の夢喰って太ってゆく都会
難しい顔も綻ぶ屠蘇の膳
社会保険あるから医者によく通い
断絶は知らぬ焼いも食べている
難しい顔してピカソの絵を観てる
土をほう虫それなりに持つ社会
難しい人は上座に奉り
生きている証にうすく古い傷
何万年前の化石に虫の愛
空っぽな頭がぶらぶら浮き上り
能面の古さが時に怖くなる
忘年会今宵は大阪市をはなれ
土壇場に一べん来いと古い友
冬至の陽雲かかるなよかかるなよ
正直者がネギを刻むとしんきくさい
冠婚葬祭古い頭を借りにゆく

度

米蔵

古傷に触れぬ約束で従いてくる
難題が又持ちあがる年の暮
古きよき一尺ざしは母のもの
鴛鴦の前で無言の偽夫婦

登

米蔵

小松園

一青

切れ切れの糸をつないでゆく女
つなかりを連れれば女の愚にかえり
つなかりの輪が八月のヒロシマに
支那製の袋に誇張ありすぎる
もう誰もたよらない日の米袋
風神の風袋欲し黒い霧
一つだけ信用出来る袋持ち
語らいの味は夜に沁む共白髪
年齢を経て血のつながりの恋しさよ
家計簿に冬の覚悟を問われても
誘惑の手が多過ぎる都会の夜
肩車の子はどんな視野を持つ
正面の敵を愛する狙撃兵
いつまで経ってもわたしの豆は青いまま
伴せは達者稼ぐと食ってゆけ
肩落す男の靴は片チビリ
殊の外厳しい冬で計が続く
つた袋修業もきびし京の街
インフレへ甲斐性のない袋貼る
懐が温くて夜が怖くなり

度

一青

退院へ今年はでかい鏡餅
のれん背に父の意見がきつ過ぎる
餅食べる孫は丸箸使いかね
六十年今まっすぐな道に出る
子に何の罪があるのと妻強し
花園を浮気な蜂が飛び廻り
掛取りにママつつましく午後三時
笑う顔見てはつととする親心
伴せは赤提灯のコップ酒

登

米蔵

小松園

花世

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

度

柳風

遍路道集印帖が旅の地図
地図広げ選挙事務所はまだとより
猛吹雪山男の地図役立たず
線路地図何処から消える赤字線
妻は妻夫は夫の地図を持ち
老人が心の地図をもてあまし
風邪引の見舞にいつてうつさる
足ふるえ危なかったと火事見舞
加害者の見舞病室に罵声とび
枕辺にそつと花束置いてくる
心から見舞えば話に無理が無い
暴走族規則無視してあの世ゆき
お米では規則犯した事もある
反発が規則の塔を揺つて見る
規則ですまあ裏もある話しより
しきたりはこうだと規則とり合わず
抜け道を探す規則を裏返し
縁起かついてみてても力の差

登

米蔵

小松園

一青

柳風

失意の日風の姿にさからわず
元旦の未明ジョギングから始め
人貧し論してわからぬ性哀し
恍惚になったるしの物忘れ
秒針が短かい余生刻みゆき
かゆする妻にすまなく雑煮喰う
福耳をもう受けついだ呱呱の声
夢でもよしやがては金になる自信
人生の深さ長さが比例せず
コーヒーが傷心に触れ不眠症
口論に勝つて心は鉛色
糸の切れた風の自由が海に落ち
吹雪ついて逢わねばならぬ女を恋う
断ち切れぬ思い残して年が暮れ
ひがんでる男同士で馬が合い
誰れがために残す日記か書きつづけ

孝 華 古 迷 晴 月 千 草 龜 甲 鉄 花 人 花 子 栄 九 二 老 多 賀 子 夢 醉 女 雄 々 寿 美 子 弘 朗 緑 之 助

音たえて陽はおだやかな春三日
岸和田川柳会 植山 武助報
欺された同志が呑んだクリスマス
来年へバトンタッチの除夜の鐘
来年は来年はとて古稀近し
受験の子へ来年と言う重み
来年の白書エンマに聞いて欲し
来年は土星に旅がして見たい
来年はポツクリ寺へまいろうか
来年のこよみへ運が開けそう
八方美人掴みどころのない本音
今年から話題豊富な孫が出来
まだ母が居るから故郷恋う心
手糸編む母は思い出繰りながら
肝心な所で切れた赤電話
いろいろなことありました暮のそば

早 苗 加 仙 信 夫 善 吉 幸 代 義 秀 武 世界人 操 子 春 榮 武 助 富 志 子 希 久 志 射 月 芳 辰 雄

雅号ぶっちゃけばなし (197)

り ゆ う し ん



津 守 柳 伸

つ も り

「駒つなぎ」発足以来お手伝いさせ
て頂いております間に「門前の小僧云
々」とか自然に作句に馴染み、先代主幹・故南柳師に
柳信と名付けられました。当時、小松園先生、白柳先
生、摩天郎先生にもご指導を受けましたが進歩は見え
ませんでした。三年ほど前ある契機を境に規不風さん
のお勧めもあり柳伸と伸びる字に改名、以来心機一転
作句の虜になっています。
皆さんからは「寺坊主の様だ、男性と思っていた」
等云われましたが、私にはピッタリの雅号だと自己満
足致しております。川柳は私の伴侶であり恋人である
と公言して、まわりの人達に気狂い扱いをされながら
職業と作句の両立へ感謝の日々を送っております。
(理容「男前」経営 47歳)

乱丁・落丁あればお取替えいたします。
本社宛へ返送下さい。

かぎりない夢に力がついてこそ
一本の庭の山茶花夕映える
数の子の値札はやはり侮れず
移転した母校親しみ湧いてこそ
陶工の魂匂う花器の肌
勝山双葉川柳会 河野 君子報
あの人のもるい瞳信じよう
明るさで荷物の中に入れて嫁く
明るくて叱るに叱れぬ嫁を持ち
陽だまりで明るいおしやべりはすんでる
心まで明るくなったガラスふき
神様をふり向かせたい宝くじ
業深き私の胸に神は棲み
欲ばりな願いと神に笑われる
医者が駄役けたら神に縋るだろう
ふる里に母あり一人の雑煮膳
餅つきの音で目ざめた幼い日
望郷の想いで寒の餅を焼く
お鏡のように添いたい夫婦です
姑がいて神棚に灯がともり
走っても所詮は主婦の枠の中
走れどもゴールに着かぬこたつの中
寒空のマラソン見てるこたつの中
老いの身は気持ばかりが先走り
倅せが待つ道ならばつつ走る
(整理・香川酔々)

節 子 民 治 郎 白 光 子 さ よ 子 ひ で 智 慧 子 千 里 秋 子 千 恵 洋 子 藤 子 静 香 妙 子 久 子 いく の 良 子 節 子 田 鶴 子 智 子 楓 子 品 子 静 子 喜 代 美 君 子

募集

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りま
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

五月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞選
水煙抄 (10句) 正本 水客選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風選
課題吟 (各題5句以内)

「電話」 光好 陽子選
「髭」 斉藤 三十四選
「路」 岩本 雀踊子選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内
字は楷書で新かなづかいにしてください。

六月号発表 (4月15日締切)

3月の常任理事会は5日 5時から

定価 四百円 (送料45円)
半年分 二千五百円 (送料共)
一年分 四千八百円 (送料共)
昭和五十六年二月二十五日印刷
昭和五十六年三月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎
印刷所 藤原 童心社
〒542 大阪府南区鰻谷中之町二〇番地
発行所 川柳塔社
電話 大阪 (六三三) 三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番
三和銀行心齋橋支店
普通預金口座番号・一〇二七八三

本社三月句会

日時 三月六日 (金) 午後六時
会場 金属会館
南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話 271・3935番

兼題 「おはなし」
「任せる」
「負」
「内緒」
「雌」

西尾 栞
玉置 重人選
村田 瓢太選
西田 柳宏子選
川村 好郎選

席題 二題 当日発表
各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

4月の兼題 「宝腰」 「野走」 「仏る」

本社4月句会は7日 (火) 6時から

ヤングのための
カジュアルウェア
Kurabo fabrics
クラブウェア
カジュアルウェア
倉敷紡績株式会社

★川柳塔十五年記念シリィ
ズ。一月号の座談会では素
通りをし作品を今月号で
多く取り上げることにした
☆一つは句集「私達」から
抄出したもので酔々さんに
担当して貰った。「私達」
は私が編集部へ入った頃、
発行の路部門の作品の集大
成で次号にも分割掲載す
る。

肉体疲労時のVB₁補給に—— アリナミンA

アリナミンA25の効能—肉体疲労時・病中病後・妊娠授
乳期のビタミンB₁補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・
肩こりの緩和、脚気。☆説明書をよく読んで
正しくお使いください。☆くわしくは医師、
薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



☆一つは川柳塔になってか
らの女流同人の句で、鬼遊
さんに挨拶の労を煩わした
共に熟読既味された。
☆二月八日鬼遊・千歩・夫
妻の肝入りで香鑑を開いて
戴いた。聞香・香合。こう
あわせ。も歌仙をまくの
同様、顔ぶれに大いに左右
されるもので、いふなれば
人合せだと思った。たいし
よの会らしい半日だった
☆「蒙雪にはや辛酉の兆あ
り西川景子」遅まきながら
雪のお見舞を申上の「薫」
☆有名名人と有名名人との
会話を有名名人が編集して
出版する。題してちよつと
いい話。そこで有名でない
人と有名でない人の会話を
有名でない人が記録して出
版する。書名をどうしよう
う。やめとけよ。売れるは
ずがない。こもつとも。料
理番組で、ほうれん草を使
う一品を放送してんた。さ
では、いまほうれん草がう
まい時だな。それでは春の
季語に違いない。歳時記を
ひっぱり出すと、己が把を

蒨葳草の葉がいたはる草田
男/夫愛すほうれん草の紅
愛す。昨、蒨葳草土に喰い
込み水る谷。歌一/ほうれ
ん草頭そろへて友をまつ
京子/などが目についた。
君見給。蒨葳草のびて
ゐる。の名吟は陽春4月中
旬くらいに光景に違ひな
らう。
☆「秋の風は高えとをコ
ーコーと音を立てて、枯れ
つ葉を吹っ飛ばして走る。
春の風はちがう。上の上を
這うように吹いてきて、木
の芽草の芽を吹かせ、おら
家みてえなあばら家にも吹
き込んで破れ障子に歌うた
わせるだ」これは詩人の書
いた詩でない。山田桂子氏
が、福島県家折町のりんご
農家、半沢安太郎さんとい
うお年寄りから十年ほど前
に聞いた話である。口から
出た言葉が詩になって私の
胸をうつ。言葉が大切にす
る川柳作家が考えて作った
句にこれだけの感動がある
だろうか。いま改めて、多
くの雑音にわざわざいさ

いることを知る。四季の移
り変り、世の流れの中で、
ものの真実を見すえる人間
のこのころの眼を、とり戻さ
なければならぬ。き
☆言葉を大切にする川柳作
家、と鬼遊さんが書いてい
るので、思いついたことを
一つ二つ。例えば貧乏とい
う言葉。国民の八割が中流
意識を持っているという。
建売ローンの支払いに窮々
としいて自分も中流だ
と思ひこんでいる人が大多
数というご時世だ。課題吟

などで「貧に耐え」とい
った類いの句を見かける
が、現実の生活感覚として
は殆んど死語に近いのでは
ないか。
☆「定退」という言葉も私
は嫌いだ。耳ざわりがよく
ない。マスコミが言葉を省
略したがるのは、それなり
の必然性があるが、美意
識に欠けるこの種の省略語
を無神経に使うのは、言葉
を大切にする川柳家として
果してどうだろうか。



たのしさひろがるお買物



昭和四十二年一月九日第 種郵便物認可
昭和五十六年二月二十五日印刷
昭和五十六年三月一日発行（毎月一日発行）

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社

大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

南紀 和歌山 四国でのお泊りは——

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れぬ はまゆうの宿

政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック

政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス

政府登録国際観光旅館 中の島

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理

政府登録国際観光旅館 湯の峯荘

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる

政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門——うずしおの宿

政府登録国際観光旅館 鳴門

政府登録国際観光旅館 鳴門公園ホテル

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理

観光旅館 紀の川苑

大阪・泉南淡輪——魚つりに ゴルフに

観光旅館 淡の輪苑

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル

ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222



南海電鉄